

関東氷上郷友会

昭和五十六年四月

第12号

山
花
友
会





渡辺紙工業株式会社

取締役会長 渡辺金三 取締役社長 岡崎一二郎

本社	大阪市城東区今福西3丁目2番24号 Tel 939-1281(代)
東京支店工場	東京都足立区中央本町5丁目22番12号 Tel 849-6611(代)
〃 関宿工場	千葉県東葛飾郡関宿町大字台町2192番 Tel 0471-96-1489(代)
東京支店営業所	東京都台東区柳橋1丁目20番4号<久月ビル8F> Tel 861-2331(代)
名古屋支店工場	名古屋市西区又穂町3丁目13番地 Tel 521-8111(代)
大阪支店 工場	大阪市城東区今福西3丁目2番24号 Tel 939-1281(代)
九州支店 工場	福岡市博多区堅粕3-16-14 Tel 411-4237(代)



渡辺製袋株式会社

取締役社長 渡辺金三

本社	大阪市城東区今福西3丁目2番24号 Tel 939-1281(代)
東京支店	東京都台東区柳橋1丁目20番4号<久月ビル8F> Tel 861-2331(代)
大阪支店	大阪市城東区今福西3丁目2番24号 Tel 939-1281(代)
藤岡工場	栃木県下都賀郡藤岡町内町4938番地 Tel 028262-3321(代)
兵庫工場	兵庫県加古郡稲美町蛸草1438-1番地 Tel 079495-0257, 0401

組曲 「丹 波」

(B) 4. 伝統のこころ

5. 希 望

作詩・船越 昌 (春日町)

作曲・内田修二 (柏原高)

新しいふるさとづくりのうた

丹波のあした

作詩・三方清三郎 (水上町)

作曲・内田修二 (柏原高)

- (A)
1. 命のみなもと
 2. 祖先の足音
 3. 秋の抒情

(30cm LP レコード・CBSソニー制作)

組曲 『丹 波』

一、命のみなもと

さみだれは 静かにけむり
 万緑に 雨つゆ光る
 まろやかに広がる山なみ
 草も 木も
 深みどりに
 歌うたいつつ
 ああ 深みどりに
 鮮らしく
 甦えりゆく
 噴きあがる ゆたかな水の
 みなもとは 二つにわかれ
 村むらを訪いゆきながら
 北の海へ
 南の海へと
 歌うたいつつ
 ああ川は 川は
 ゆるやかに
 今日流れゆく

命さかえる緑の雨よ
 くちびるに歌をはぐくみ
 なりわいを 養う水よ
 人びとの心つちかい
 村むらをつなぐ流れよ

二、祖先の足音 (略)

三、秋の抒情 (略)

四、伝統のこころ (略)

五、希 望 (略)

註 このレコードは郷土の音楽文化の向上に寄与するために結成された、水上郡民合唱団『パストラール』の吹込みである。『パストラール』は田園という意味のドイツ語でベートーベンの交響曲第六番から採ったという。昭和四十六年六月結成され、本年は十周年記念事業の一環として自費出版されたという。演奏は指揮内田修二、ピアノ内田規子、ナレーション川村芳一。お申し込みは左記へ

兵庫県水上郡柏原町柏原五二五ノ一 電話〇七九五
 七二一〇二四〇 水上郡民会館内 足立吉裕氏宛
 レコード実費二、五〇〇円 楽譜八〇〇円、送料実費



山ざる 第12号 目次

表紙画『菊』……………常岡 文亀……………

(昭和二十九年作・渡辺金三氏蔵)

組曲『丹波』……………船越 昌他……………1

81御挨拶……………足立 三治……………2

会員名簿の掲載について……………編集委員会……………3

小谷正雄博士に文化勲章ク……………4

文化勲章受賞・祝寿会華やかに開ク……………5

小谷正雄は天才だ……………田辺輝一郎……………5

祝寿お礼のことば……………菱田ふみ子他……………6

ふる里の埋蔵文化財……………芦田 確次……………7

丹波の思い出(芸能を含めて)……………小林 武治……………10

丹波の生んだ名工……………荘 正衛……………12

狛犬は祖先の寄進……………上山 顕……………14

自叙伝出版と胸像の建立……………有田 喜一……………15

永井さんのこと……………西川 政一……………16

祖父のお墓詣り……………田 英夫……………21

はるかなる青春の日々……………坂本 重雄……………22

『山ざる』と石橋社長……………永井 勇……………23

「山ざる」退治作戦……………畑 正義……………25

日本舞踊ひと筋(中)……………西崎 祥……………27

御挨拶

会長 足立 三治

来る年来る年、初春のよ
 ころと共に大いなる希望と夢
 を胸に抱きながら、今年こそ
 は良い年でありますようにと
 ひたすら祈らずにはいられま
 せん。

昔から一年の計は元旦に有
 りと教えられて参りましたが、
 予期しない変化に左右される
 現代社会にあつては、せつかく何か素晴らしい計画を思いつ
 いても、なかなか思うような成果を挙げることができません。
 また人々の心にも、少しのゆとりすら見受けられない社会の
 淋しい現実を知るとき、私共は今後どのように対応すべきか
 を深く反省し、自覚すべき年ではなかるうかと考えます。

昔の諺に「成せば成る、成さねば成らぬ何事も、成さぬは
 人の成さぬなりけり」とありますが、丹波人たる皆さんにこ
 の際この信念を発揮されるよう特に望んで止みません。

大変無遺憾なことを申し上げましたが、長い年輪を積み重

スイス「グランボー村」訪問記……………	伴仲 信次……………	31
懸命に生きています……………	林田 孝子……………	33
私のふるさと今昔……………	木村つた多……………	34
今の幸せを感謝……………	音無太美子……………	35
本の紹介―続『写真和田村史』『丹波の荘園』		
『八潮詠草』抄『丹波の綿』……………		36
〔特別寄稿〕これからのエネルギー問題・若森 敏郎……………		39
〔特別寄稿〕南アジア視察記……………	西山敬次郎……………	46
柏陵同窓会五十五年度総会……………		50
常岡幹彦個展……………		50
囲碁同好会の成績／ゴルフ同好会報告……………		51
『山ざる』の会／ひかみ会について……………		51
本会を脱会希望の方々へ……………		53
転居・転任／新規会員／訃報……………		53
お便り・短信……………		56
高速道は五八年開通の予定……………		61
五五年度総会／会計報告／新年役員会……………		65
関東水上郷友会の沿革／会則……………		67
年会費領収報告／寄附者芳名／本会役員……………		68

ねて来た私の真理の声としてお許し下さい。

さて、関東水上郷友会はお蔭さまで役員はじめ会員各位の深いご理解とご支援とにより、ますます発展の一端を続けておりますことは喜びに堪えません。本会恒例の祝寿会も、小谷正雄博士の文化勲章受賞のお祝い兼ねて、本年も多くの郷友の皆さんのご参加のもと盛大に行われました。郷友会の記録に残るおめでたいことでした。

終りにのぞみ、本会が郷土愛を中心に一致協力、益々の発展を期し、会員各位とふるさとの皆さんのご健祥とご多幸を心から祈念してご挨拶といたします。(つるや産業㈱社長)

会員名簿の掲載について

毎号巻末に掲載していた『会員名簿』をこの号では取り止めました。今後は隔年掲載することとし、そのかわりに内容を一層充実し、会員各位のご要望に応じていくことになりました。悪しからず御了承の上ご愛読、御支援のほどお願い申し上げます。

編集委員会

小谷博士に文化勲章

郷党あげて祝詞を贈る

五十五年の文化勲章は本会顧問、東京理科大学学長、分子物理学・生物物理学の権威、柏原町出身の小谷正雄博士ら五氏に贈られることとなり、さる十一月三日の「文化の日」に皇居宮殿「松の間」で、天皇陛下ご臨席の下に、鈴木首相から文化勲章が伝達された。

小谷博士の経歴

小谷氏は明治三十九年一月柏原町に生まる。昭和四年東京大学物理学科卒業、一八年理学博士、四一年東京大学名誉教授、四五年七月東京理科大学学長就任、今日に至る。

その間、二十三年日本学士院賞、四十二年東レ科学技術賞、四十九年藤原賞、五十二年文化功労者に選ばれている。同博士の研究は分子の量子学的研究で昭和十三年に発表した「分子エネルギー計算のための積分表」は世界的に利用されて高い評価を得ているといわれる。また戦時中はマグネトロンが発振機構と立体回路の理論的研究で成果をあげ、さらに去る三十五年には日本生物物理学会を創設、この新しい分野の研究にも功績が高く評価され、今回の受章となったものといわれる。(松)



昭和五十五年度文化勲章受賞者の栄えある記念写真（向って右から二人目が小谷正雄博士御夫妻）=読売新聞社提供=

文化勲章受賞のお祝いと恒例の祝寿会

華やかに開く



祝寿を受けた方々。左から松山、福島、林田、菱田の皆さん。

五五年度の総会に先だつて、十一月十六日正午より小谷正雄博士の文化勲章受賞のお祝いと祝寿の会が東京青山のダイヤモンドホールで盛大に開かれた。まず伴信次副会長から「郷党にとってまことに誇り高い受賞である」と前置きして、小谷博士の榮譽をたたえ、ついで足立三治会長より祝詞と受賞に対する郷友会よりの記念品、有田 薫『晩香』花瓶一基を拍手の裡に贈呈、これに対し小谷博士より謝辞があり、有田喜一名誉会長から祝詞を



足立会長より受賞お祝いの記念品を受ける小谷博士。

述べて、受賞式を終った。ついで祝寿式に移り、本年の祝寿者

林田孝子さん

福島輝子さん

菱田ふみ子さん

松山幸逸氏

矢持七郎氏（欠席）

田沢よしゑさん（欠席）

の四氏に対し、足立会長より祝詞と記念品（窯変彫花生一本の目録）を贈呈、これに対し祝寿者一同を代表して松山氏より謝辞を述べて、めでたく二つの祝事を終ったのであった。

小谷正雄は天才だ

田 辺 輝 一 郎 （柏 原）

この度小谷正雄博士が文化勲章授賞の名誉に浴された。郷友の一人として心よりお喜び申し上げる次第である。



田辺輝一郎氏

筆者が昭和三年東大工学部機械科に入学した時は同学部の制度は自由単位制度で聴講を希望する場合は各先生の部屋を訪ね自分で申告して許可を貰う事になっていた。先生は確か講師であったと記憶するが、部屋を訪ねた時、若い小僧のような人がいたのでまさか小谷先生とは思わず、多分助手が代行していると想像し、ろくろく挨拶もせず許可認定の捺印を頂いたのである。

次は講義の初めての時先生が教室に來られた時またいつかの小僧のような助手が先生よりひと足先に來たものと思い一同始業の礼もせず先生の來場を待ったのである。ところがその小僧が教壇に登り『僕が小谷です』といわれ一同小谷先生の実像を知った次第である。

先生の講義はわれわれには難解の数学特論で熱力学等の基礎になるものであり苦勞したものである。

ここで先生にまつわる面白い話があるので書いてみたいと思う。

当時の第一高等学校でポート部の選手をやり、三年過程の処を六年かかってわれわれの下級に入ってきた黒田幸二という豪傑がいた。たまたま本郷の一杯呑み屋で飲んでいたら、彼が入って来て彼と話をしているうちに談偶々小谷先生の話に及んだ。

彼は小谷先生の先輩であり、また後輩でもあった。即ち彼は小谷先

生より早く第一高等学校に入学し、その後落第したので卒業したのは先生が既に東京大学を卒業され工学部の講師になられ、さらにその数年後と云う計算になる。

彼曰く『小谷はいわゆる秀才ではない、彼は天才である』と『何となれば俺は試験前に彼のノートを返却すると云う約束で借りて勉強した事があったが、遂に試験日前の返却の約束を果さなかった。然るに小谷はノート無しで全部試験が出来ていたのには驚きもし、全く自分が嫌になった』と。

先生は物理学会等その方面の世界に活躍されておられる事は皆様新聞或いは雑誌を通じて御承知と思う。

筆者は氷上郷友会の大会には仕事の都合上また居住地が遠い関係で欠席が多く、余り熱心な会員とは云えないが、今から二〇年位前と記憶するが、神田の登亭で郷友会を催された時出席して小谷先生に久しぶりでお目にかかり、先生が柏原の出身の郷友である事を初めて知ったのである。それ以来郷里出身の偉大であり、文理科大学学長として活躍される様子を陰ながら見まもっていた。この度の授賞は当然と思料するものである。

(元東芝機械役員、現明石製作所顧問)

御礼のことば

菱田ふみ子さん

過般は盛大な長寿のお祝いをお聞き頂きありがとうございます。八十年という年月、長いような短かいような、よくもこの席に連なら

せて頂いたものと感無量でございます。有田喜一先生のおとなりに座らせて頂き、先生から「あの世から迎えが来たら『百になつたら折りを見て行く』といえばいい」と教えて頂き、大変心強く感じました。

矢持七郎氏

過日総会と長寿の祝寿会を催すと出席の御案内を頂きましたが、病気のため、遺憾ながら欠席の止むないことをご返事申し上げておきましたところ、図らずも長寿のお祝いとして大変結構なる記念品をご恵送賜り拝受いたしました。誠に有難うございました。厚く御礼申し上げます。乍末筆郷友会の発展と会員各位のご健康をお祈り申し上げます。

林田孝子さん



祝寿記念に贈られた『窯変影花生』

過日はお招き頂きまして八十歳のお祝いを受けさせて頂きまことにありがたく生涯のよろこびと厚く御礼申し上げます。その節は記念にと立派な花瓶を御贈り頂きまして温かいお志に感謝申し上げます。いづまでも身近に置き樂しませて頂きます。厚く御礼申し上げます。その席では小

谷博士の文化勲章御受賞の御祝いにはべらせて頂きうれしく存じました。先生は御幼少の頃からずばぬけてご優秀でたくさんのエピソードを皆々様から承わった事を覚えて居ります。唯お一人のお子さまで御両親様の御満足、又およろこびは一入だった事と拝察しております。おめでとうございます。』

ふる里の埋蔵文化財

芦田 確次

(黒井)

ふる里の埋蔵文化財について書けという「山ざる」編集子の連絡をうけて久しいが、そのうちにと思いながらご無沙汰していたところ、年の瀬も押し迫った十二月下旬に、春日町内の農地整理工事現場から弥生時代の大群集住居跡が発見され、連日新聞が報導して兵庫県下で一躍脚光を浴びることになった。その報告を兼ねて水上郡内の埋蔵文化財あれこれ綴り責を免れることにする。

埋蔵文化財とは、土中に眠っていた文化財のことをいう。古墳から発見される石器や土器、遺構もそうだし、山の中や田んぼの地下から見つけ出される先人の住居跡や、使っていた生活、祭祀具などその種類は多種多様である。これまでに郡内から発掘されたものは石器時代後期の石斧、石包丁、矢じり等から次いで縄文時代の磨製石器や土器片、次の弥生時代になると出土品はぐんとふえる。普通縄文時代と呼



春日町七日市区の耕地整備工事現場で発掘された「柱根穴」の模様

ばれているのは紀元前七・八千年前から数千年間を言い、次の弥生時代は紀元前三世紀から三世紀までを、次いで古墳時代、奈良時代、平安時代へと大まかだが分類されているが、縄文・弥生時代でも石器が使われているし、弥生時代になると銅・鉄器があらわれて金石併用期になり、学問的には縄文弥生時代をそれぞれ前・中・後期に分け、出土した文化財鑑別に資している。

○ 水上郡へはどういう経路で先住人が入ってきたかが、山伝い説、川伝い説に分れるけれども瀬戸内海から加古川をさかのぼってきた石種族と、日本海側の由良川を南上した種族（遠阪峠を越えた族も同じ）がまとまりの大きかったことは出土品等から推察されている。山南町に奥、村森という一帯がある。佐治川と篠山川が合流して播州へ流れこむ加古川のすぐそばの高地帯だが、そこからは旧石器時代に属する礫器や新石器時代のものと考えられる石斧や石矢じりが畠の中から多数見つかっているし、もう少し後世のものだが魚をとる網の重し石やめずらしい石棒（男根の形をした）もみつかったし、近くの和田地区梶でも同種のを発掘しており、三千年四千年昔にわれわれの祖先が住みついたあかしである。

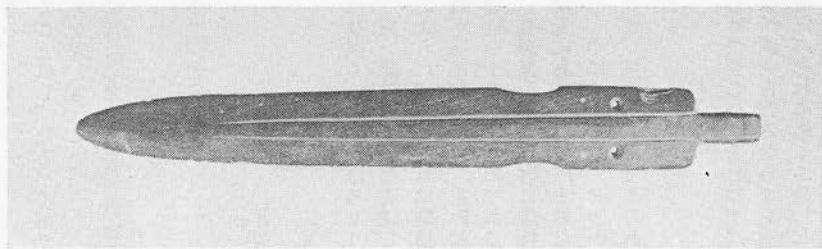
先人たちは水に近くて、水に浸されない小高い土地で、日当りのよい所を選び住みついた。山が浅い水上部では加古川（佐治川）、竹田川の両岸沿い及びその二つの川をむすぶ柏原町、春日町が早くから開けたことは、出土した石・土器や古墳等からみて推測できる。古墳時代の終りは約千三百年以前となるが、十年ほど前の調べでは、郡内に約四百ほどの古墳があることがわかった。水上町油利の百塚は知られ

た群集墳地区だが、小川地区の奥村の丸山は雄大な群集墳丘で、調査が進むにつれて当地方ではめずらしい複合古墳（大きな墓山にさらに小さい墳を築造する）とわかり土器類、玉類、剣、鏃、馬具、鏡、石製品が発掘された。佐治川沿いに旧幸世村あたりまでは特に小円墳が多い。

竹田川筋も特にも多いのは春日町内多利から国領辺りまでで、多利には郡内唯一の「二間塚」という前方後円墳があるが、他の墳と同様に盗掘されてしまっている。この佐治、竹田川の接点となる黒井、船城地区Ⅱ稲塚、山田、長王Ⅱには山上墳が多いし、氷上町の石生周辺や柏原町の新井地区Ⅱ孝田、大新屋、北山Ⅱも墳輪を並べた古墳や古鏡の出た墳がある。それら円墳の中で傑出しているのは氷上町北野の親王塚で、規模も大きいが神獸鏡や杏葉等がみつきこの地方を統率した有力者の墓とみられ、稲塚のおほ塚は面積約一七〇坪、出土した杏葉、轡、斎瓮は旧東京帝室博物館に保管されたし、黒井兵主神社裏の古墳からは鉄、馬具も出土した。船城の天王神社辺からは勾玉、管玉類が出ているが、どの古墳からも多く出てくるのは土師器類の壺、碗、高杯、皿等である。

先日、神戸市の未知の人から電話で「知人から古い壺など譲りうけたが、それ以来家に不幸が続くのはその土器の精と思う。春日町の古墳から掘り出したと聞いているので、ふる里へ返すのが一番よいと思うので引きとってほしい」意味の連絡があり、今は春日町公民館の倉庫に眠っているが、最近この種の盗掘野郎が出没するので警戒をしている。

さて、春日町の住居跡発見（写真）だが、今春日町は全町的な耕地整備工事が行なわれており、昨秋の収穫あと七日市と野村境一帯の農地の表土を削り集め、一枚が三反の田に仕立て直す大事業が始まっている。そこは近畿高速自動車道舞鶴線の春日インター設置予定地隣で畦一つが境になっている。その耕地の表土をめぐった跡に柱穴らしいものがあるのを、隣のインター用地の埋蔵文化財調査をしていた県教委の調査団が発見し、精査した結果、弥生時代後期（千六百年ごろ）とみられる多数の土器片Ⅱ高杯、皿、碗などⅡと、また俵を編むときに使う「うちのこ」や雑多な柱痕がみつきり平安時代にも再び人びとが住んでいたと考えられる複合住宅跡地とわかった。その面積は約十平方メートルにおよび、兵庫県下では最大の古代住居地跡ではないか



春日町棚原地区から出土した珍しい石剣

とみられている。

ただ今は、整地工事を全面中止し、またインター建設用地も同様に調査するための準備をしており、年明けて大々的な発掘を続けるが、すぐ近くの野村、棚原境の田んぼからは昭和四十二年に瓦土を掘り出して有様式石剣（写真）が見つかつた。県の重要文化財級のもので、弥生時代の祭祀用につくられたものである。今後の調査でどんなものが発掘されて古い時代の解明の手だてとなるか期待されるわけである。

○
埋蔵文化財では、市島町上田に国史跡に指定されている「三つ塚廢寺跡」がある。広大な原野が、丹波地方では最も古い時代のお寺跡とみられ、大きな柱の礎石や布目瓦が出ており、堂塔の跡らしいものも発見されて、一帯を文化財公園とする計画が進んでいる。

また水上町大岡の佐治川と葛野川の合流点附近の田んぼからは弥生式土器片が多数出ているし、水上町市辺のバイパス工事では、地表下四〇センチのところに柱穴が多数散在して大昔の倉庫跡か住居地跡か話題になつた。

とにかく、先人の住んでいたことを立証する石斧や石包丁やその他の生活、祭祀具が発見されたのは水上町稲畑、柏原町鴨野、春日町鹿場、同多田等のほか、最初にあげた山南町の小川地区など全都にまたがっているし、黒井川を改修した大正二年に、泥田の底から周囲三メートルからの大木の半化石が幾つも発見されて、大森林地が近くにあったことを物語り、船城、黒井、春日部にかけての亜炭地帯には大古の植生を知ることができると貴重な資料が埋れていて、埋蔵文化財調査

はまだまだ奥が深いというのが現状である。

冗長になるので、ひとまずこれで措くことにし、なるべく解りやすいようにと考へて不備な点ができたことを諒とされたい。

（春日町文化財審議委員会会長）

《その1》

丹波の思い出—芸能を含めて—

小林 武治

（春日）

かへり来るゆふへの道の稲木道にはひ温くたく稲かほるなり
私の若い時代の思い出の一首である。長い間丹波新聞を購読して居るが、丹波も年々に新しく変わりつつあるように思う。それは結構なことで、丹波、丹後、但馬のいわゆる三丹が過疎化を防ぎ、京阪神を近く控えた土地だけに近代化される必要性を十分感ずるのであるが、それと同時に、丹波に残る古く、よき、有形無形の文化財は維持してほしいことも、私の念願である。ただ観光にあこがれて、そのためにする色々のことは、ただけいけないものも、中にはあるし、せっかく伝えて来たよいもの、由緒あるものが次々と、意識的にか変えられてゆくことは却ってさびしい気がしてならない。

○
東京在住の郷土の皆さんは時々会うだけで楽しい。それはやはりどこかに郷土のにおいがし、ふるさとの味が感ぜられるからである。その機関誌「山ざる」は本當にふるさとを偲ぶそれに最もふさわしいも

のだと、つくづく思う。

「デカンショデカンショで半年くらす、あとの半年やねて暮す」

デカンショ祭とかが近頃盛んなようだが、明治の東京の学生間に流行したあの節はどうも本物ではない。本唄はもつと地味なさびしい唄ではなかったか。デカルト、カント、ショーペンハーベルなどの頭文字をとったなんて山ざるも笑うことだし、灘、伏見の酒造りに出稼ぎする杜氏さんたちの唄でもない。前掲の唄のあとの半年やねてくらすの文句が四国や九州地方の唄にもあつて同じ文句がかく離れた所にもあることは一応不思議な現象ではあるが、それがまた民謡の特性かも知れない。浅野建二氏は今田町あたりにあつた糸つむぎの、「デコンショ節」が元ではないかと言っている。そう言えば何か元唄があつた気もする。このデカンショは「出かけましょ」ともとれる。尚適切なものが、地元には残っているかも知れない。誘い会つて夜明け近くに草刈りにゆく唄なども想像してはみたが、大体草刈り唄は



小林武治氏

「朝の出がけに山々みれば、霧のかからぬ山はない。」
が多く、全国的に「朝の出がけ」の唄は残っている。そう言えば旧盆過ぎになると、丹波地方は急に霧が深かたちこめていた。泣いても笑つても、稲の作柄の状態は決定している頃である。あれほど農作を祈る祭や行事があつて

も、天候その他で不作の年もあつたようだ。

○ 先年稲塚の「風流神踊」が選ばれて、上京し、日本青年館でこれを演じた。序に国学院大学にも来ていただいて、この踊をみせてもらった。大正天皇御即位の祝いに踊られたのを、子供心に少しは覚えていた。これは雨乞い踊りであるが、要は農作を祈るわけである。私の学校の小林文庫には風流系の古書が多いが、稲塚古寺家の嘉永年間の書写のものもある。風流は延年風流などと言って、室町頃には多分田菜と併存して行われたものだろうが、全国的に広い分布をもっている。ことに三丹や播州にも多く残っている。稲塚のは最も整つたもので、その中に新発意が出て来る。

それが大新屋や多田の新発意踊の名となつたものだろう。踊りは恐らく同じ系統である。また新郷などの百石踊りなども同じで、風流大踊りは一踊に百石の費用を要したとも言われている。広島県三次地方の「はやし田」など、田植の五月女を慰める為とか何とか言われているが、田植近く、山の神は田に降りて来ると言われている。その神を慰めることが、農作祈願につながるものだろう。はやし田の装束その他風流の名残りをとどめている。

○ 元来田菜には大田菜、小田菜があつたと同じに、風流にも大風流、小風流と、大小があつた。田菜の元は「田遊び」で、今も田遊び行事の残っている所もある。これも農作祈願の祭事であつたことは間違なく、唐菜の影響から田遊びが田菜になり、それが分れたか否か不明だが、少なくとも採りいれられて猿菜や、又管素化して風流を生んだと

も考えられる。近松の作品にも、「そこらでふれさ」などと歌う場面があった気がするが、春日町あたり、ふり踊、ふれふれなど残っている所があるようだ。以前臼井芳郎氏が、丹波新聞に発表された新発意踊の中に、確かに室町の閑吟集にある歌と似たのがあった。引越しでなくしたので、親戚にたのんで大新屋の台本を送ってもらったが、もうその歌はなかった。風流の中には室町時代小歌集や閑吟集にある歌もあり、かなり古く、是非新文化の中にも残してほしいものである。因みに臼井芳郎氏は米の歴史を丹波新聞に連載されたが、興味深く読ませてもらっている。こうした郷土の古い文化を研究する方は本当に尊い。今迄いろいろ発表されたものも、一々丹念に拝見して来た。

○

方言には区割説と周圀説の両学説があるが、芸能や歌謡なども周圀説でないと解せぬものが多い。何と言っても文化の中心の「都」に近い故に、都のものがすぐ影響した一つが丹波であったと思う。一方は近江から東へ流れて行った。だから岐阜県などにも風流のよく似たのがあるし、越中五ヶ山の「こきりこ」(無形文化財)なども、田楽が風流の影響を受けているように思う。

加古川は南へ、由良川は北へ、古代の水運を考えると、なるほどと思うことが多い。加古川上流佐治川の筏流しももう遠い昔のことのような気がする。ここ四、五十年で丹波もすっかり変って来て、民謡なども新民謡が作られ、全く老人達は他国の唄で、新しい振附けの踊りを習っている時代である。変りゆく丹波に風流はすっかりした唄と踊りが残っている。これを原形で残してほしい。この次は猿の国丹波と猿の芸能を書かせてもらおう。

(国学院大学理事長)

△隨筆▽

丹波の生んだ名工 — 丹波佐吉 —

在 京都 莊 正 衛

(柏原)

丹波佐吉は本名は日下、晩年村上照信と改めたが、一般には丹波佐吉として知られている。文化十二年(一八一五)但馬朝来郡竹田に生れたが、家貧しくしてしかも早く両親を失ったので、五歳の時丹波大新屋の石工難波金兵衛の養子となり、我が子のように育てられて技術を習ったが、のち男子が生れたので佐吉は同家に暇を告げて大阪の石屋「石為」に奉行し修業を重ねた。生来技能に秀れまた非常に律義な性格であったので元の義父に当る金兵衛の恩を忘れず、人からその郷里を尋ねられると、必ず丹波大新屋と答えていたので、人びとから丹波佐吉といわれるようになった。のち宇陀(奈良県)や京都へも移り修業を続けたのであるが、ある時、同業の仲間で石の尺八を作ろうと競ったが、佐吉はみごとに完成し、それがのち、孝明天皇に献ぜられるや日本一の石工の辞を賜わったと伝えられている。正しく現代の間国宝というところであろう。

柏原の人ならば誰でも知っているが、八幡神社の拜殿の前に左右に

並んでいる二つの狛犬がある。これは柏原の誇るべき文化財の一つと
いってよいであろう。

先般、神戸新聞に「学校人脈―柏原高校」が廿四回に亘って連載さ
れた。そのトップに郷土の生んだ人物として芦田均が取り上げられ、幼
時のエピソードが紹介されたが、それによると芦田は幼くして柏原の
小谷家に預けられ、そこのおばあさんに連れられて毎朝八幡さんに参
拝することを日課とした。その社殿の狛犬の作者丹波佐吉の生いたち
について話を聞いているうちに、いつしか自分の環境と佐吉の生涯・
生き様に思い合せ深い感動を覚えたという。それが動機で後年宰相の
地位につくようになったことが、詳しく述べてあり、二人の偉大な
人間関係がややフィクションらしく画かれている処がないでもないが
生々と描写されている。



氏正 正衛氏

また、京都の北野天満宮の境内には多くの牛の彫刻が奉納されてい
るが、中でも本殿のすぐそばに大きな台座の上に一際目立つ巨大な牛
の作品がある。神社でも永年
誰の作か詳らかでなかったよ
うなので、郷土の名工の為に
も是非解明しておきたいと思
い、先般私はその資料を送っ
た処、同社は早速機関誌「天
満宮」に「本殿右側の牛の
像、名工丹波佐吉の名作とわ
かる」と題して拙文を掲載し
神社でも喜んでくれ、また信

徒の関心をもよんだ模様であった。

因に先年蘇峰会が徳富蘇峰の植梅碑を境内に建立するため神社に依
頼したのであるが、佐吉の牛のある場所は最高の位置で現在ではとて
も不可能なことで、本殿より遙かに離れた個所にしか許されなかった
経緯を思い合せるにつけても、彼の作品が当時如何に高く評価されて
いたかをうかがい知ることが出来よう。

彼は晩年郷里大新屋に帰り、上山成績（本会員上山顕氏の祖）に師
事して学を修め、最後は仏門に帰依した程である。

因に八幡神社の狛犬は師上山成績の寄進によるものである。
余談ながら先年本誌に上山顕氏の「空想の郷土博物館」なる興味深
い文を拝見したが、その中になぜか佐吉が挙げられていないのが不
思議に思ったが、祖先との係わりを考慮されたのことに、推察している。

彼は晩年のある日飄然として家を出たままついに再び姿を此の世に
現わさなかったと伝えられている。一般には「彼晩年精神や異状を
来し」と記されているが、私はそうとは思われない。むしろ芸術に生
き抜き人生の真髄を探求した人であったと考えたい。数奇な運命の芸
術家の終焉とはいえ、郷土の誇るべき真実の人間であったと思う。人
生は短くとも彼の芸術は永遠に光を放つてであろう。
最後に彼の作品の主なるものを挙げよう。

- 一、狛犬 文久元年（一八六一） 柏原町八幡神社
- 一、牛 京都市北野天満宮
- 一、狐像 安政五年（一八五八） 柏原町北山稻荷神社
- 一、不動尊像と狐 柏原町上山家

一、文珠菩薩像 大阪市小而家
宇陀町神楽岡神社

〔本稿は丹波人物志（松井拳堂）文化財散文（林利三郎）
柏原町の文化財（柏原中央公民館）を参考とした〕

（附記）丹波佐吉と生前最も親交の深かった上山孝
之進氏の四代目、現上山頭氏から次のような貴重な写真
と解説をいただきましたので、ご紹介いたします。（松
山）

狛犬は祖先の寄進

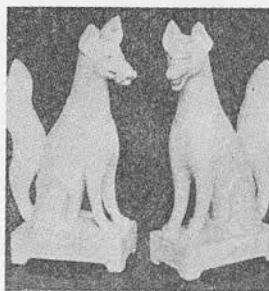
上山 頭

（柏原）



八幡神社の狛犬（上山氏提供）

八幡神社の狛犬 三十
年ほど前私が撮影した
ものです。私から四代
前の先祖の上山孝之進
藤原成績が親戚の北山
村田口金次と共に寄進
したものです（神社に
向って右側のものが孝
之進、左側が金次）。



写真Ⅱ 柏原町の上山頭氏方所蔵の丹波
佐吉逸哉の作 きつねと不動尊像

書は筑前の女儒亀井小栗の筆になり
ます。大変雄健でしょう。離れ座敷
にかかっている「見栄亭」の額がや
はり小栗の筆です。子供のとき父か
ら亀井という儒者の娘の書いたもの
だと聞かされ、娘という妙齢の女性の
女性を想像して、まるで男のよう
な字だと思っていました。後年読み
ますと六十嬢とあります。狛犬
の書も同じ時のものだと思います。

不動尊像 もし莊君の文中に引用され
ていましたら、お使い下さい。
大阪小西家蔵の文珠菩薩像 これも、
もし莊君の文中にあれば、私に
は次のような思い出があります。

私の子供のころ、文珠菩薩像の写真が
家にありまして見た記憶があります。
獅子に乗った仏の像は大変珍しく、
とにかく大作で、かつ



精作でした。その写真はいつの間にか見えなくなっていました。終戦の前後、私は大阪府庁に勤務していました。終戦後のこと、父から小西家のことを聞かれ、探してもらいましたが、戦火で焼けたか、引越先はわからないとのことでした。

自叙伝『八十年の歩み』の出版と 郷里での胸像の建立

有田 喜一

(氷上)

私は今年の四月三十日で満八十歳になるのだが、八十年といえば随分と永い間のような気がするが、また同時に早や八十歳にもなったのかと短いような感じもする。



有田喜一氏

もの心のついた幼少の頃から、い、い、ちままでの記憶を辿りながら、思いついたままのことを書き綴ってみた。これが今回出版する私の自叙伝『八十年の歩み』で

ある。日記をつけていたわけでもないので不明確な点があるかも知れないが、

(一)生い立ち (二)官界時代 (三)政界時代 (四)余生の時代
と四章に分って編纂した。

「生い立ち」は幼少の頃から大学を卒業するまでのことであって、いわば社会人として活動するまでの準備時代である。社会人となってからは大雑把にいつて官界時代と政界時代ということが出来るが、私の官界時代はいづれかというと言尊民卑といわれた時代であり、また政界時代は国会は国権の最高機関として国会議員が羽振りをきかした時代であって、それだけに私は官界の時も政界の時も共に責任が重く、働き甲斐があった。実によき星のめぐり合せであったと思う。

その私の活動が国家国民のために裨益したというので、先きには皇居に於て天皇陛下みずからの励ましのお言葉を戴き、勲一等旭日大授章の勲章を賜るの光栄に浴し、また近くは郷里において郷土開発発展のために貢献したというので、私の功績を後世に残さんがため、石井敏秋水上町長を初め生田克己県議、小谷祐通前篠山町長、木本三郎豊岡市商工会議所会頭などが発起人となって、多数の有志相寄り図って水上町役場前の広場に私の胸像の建立が進められていることは、私が政治を志すとき「国のため郷土のために役立ちたい」と誓ったことが具現化したことの顕われとして誠に感謝に堪えない。

東京では福田元総理を初め、多数の方々が発起人となって戴いて、自叙伝『八十年の歩み』の出版記念と兼ねて私の全寿の祝い」を五月十二日(火曜日)午後六時より赤坂プリンスホテルに於て開催して下さいとのことで誠に感激に絶えない。願わくは郷土御出身の皆さんも

当日の会合に御参加、御出席賜われれば幸甚である。

なお郷土における胸像の除幕式は七月頃の見込みである。

私は病氣（心臓病）のため、政界の第一線を退いたが、国のため郷土のためという一念は毛頭変わらない。幸いにして健康は次第に回復し（毎日の腹薬と月一回の病院通いは続けているが）只今は自民党を顧問は元より、日本海運振興会の会長を初め日華観光協会の会長、湊川相野学園の名誉学園長その他、数々の意義ある仕事を与えられ、暇で困ることもなく、さりとて忙しくて仕方がないという程のこととな

永井さんのこと

西川 政一

（市島・竹田）

永井幸太郎氏のことを書けという仰せである。だが、どうも、永井幸太郎氏ということばはなじまない。私にしてみれば、もう五十年以上も昔から永井さんと呼びなれているので、失礼して永井さんと呼ばせていただく。

ところで、さて筆をとってみて考えるに、永井さんという大きな人物像の万分の一でも画けるかどうか、正に群盲象をなでの譬えの通

く、ゆつたりとした気持ちで人間らしい余生を送らして戴いていることは、全く、先輩、同僚の各位並びに郷土の方々及び郷土出身の皆さん達の賜ものと感謝感激に堪えない。

私の只今の悩みは丹波から私の後継者としての与党代議士が未だ出ないことである。真に丹波を愛されるなれば、願わくは丹波から但馬に流れる投票数よりも但馬から丹波に戴く得票数を多くして、少なくとも一人の与党代議士は丹波より中央政界に送り出して戴きたいものである。（本会名誉会長）

り、不安が先に立つ。私にとってみれば、永井さんは郷里の先輩、学校の先輩、更には男子として一生をかけた貿易という仕事の先輩のみにとどまらず、あらゆる面で永年の間、師として仰いできた掛け替えのない人物だといっても過言ではない。師として仰ぐ人物、それも現在卒寿を越してなお矍鑠たる大先輩、ましてや私自身の、決して短くない人生の公私にわたって極めて親しくしていただいたかた永井さんについて、さてどういふふうを書いてよいものやら、いや、本当に困った、困った、困ってしまった。

私は水上郡竹田村の生れだから勿論小学校は竹田小学校に通った。家の財政状態から結局は竹田小学校の高等科へ進むことになったが、子供心にはひそかに柏原中学校へ進学したいと思っていた。当時はそんなことは知る由もなかったが、永井さんはこの中学の御卒業であつて、それから神戸高商へ生まれ、神戸高商では第三期の大先輩、先般亡くなった高畑誠一氏や和田恆輔氏ならびに出光佐三氏と同期生で

ある。

私が希望通り柏原中学校に進んでいたら、ひょっとすると全く違う人生を歩んでいたかも知れないし、永井さんについても単なる中学校の先輩というだけで、今のように公私にわたって種々御指導をいただく恩恵には浴さなかつたかも知れない。実際、人の運命というものは不可思議なもので、私は高等小学校へ進んだために、御縁があつて神戸の鈴木商店に就職することになり、永井さんとも会社の中で先輩後輩の間柄になったのである。

二

私が鈴木商店へ入社したくんだり、先年日本経済新聞の「私の履歴書」に詳しく書いたし、これが最近日本経済新聞から合本となつて出版されたので省略するが、郷里の先輩である永井さんを鈴木商店で認識したのは、私がまだ鈴木商店輸出部の通称「ボンさん」時代であつた。或る先輩が私に「君は丹波出身だそうだが、今、ロシアのセント・ピーターズブルグ（現在のレニングラード）に駐在されている永井幸太郎さんも確か丹波出身だつたぞ。機会があれば一度手紙を出したらどうか」と教えてくれたのが最初だつたと記憶する。

当時、といつても大正五、六年頃、第一次世界大戦が勃発し、ロシアに革命が起こるなど世界情勢は極めて流動的で、日本の貿易が急激に増加し始めた頃で、鈴木商店もロンドン、パリを始め、欧州や北米に当時としては数多くの海外駐在員を派遣しており、永井さんも学卒若手バリバリの社員で、セント・ピーターズブルグに駐在されていたのである。

どういふ文面の手紙を書いたのか覚えていないが、とにかく先輩の

すすめによつて手紙を出したところ、早速永井さんからロシアの首都の風景鮮やかな絵はがきが来て、「同じ丹波の産の山猿、世界を相手にしつかりやろう。」という激励の文章を覚えていた。外国の絵はがきが私宛に来ること自体、大感激であつたのに、郷里の身近かな先輩の直接のはげましの言葉で私は本当に気が遠くなるような感動を覚えた。今日、私がこうしてあるのもその時の感動が原動力になっているといつても決して過言ではない。当時、私は多分十四、五歳、いつてみれば私の人生の出発点において永井さんは大きな指針を私に示して下さつたものである。

三

ところで、鈴木商店は昭和金融恐慌の引き金となつて、ああした形で昭和二年四月二日支払いを停止し破綻したわけであるが、鈴木商店時代の永井さんの活躍を書こうと思えばそれこそ枚挙にいとまがない。新聞記事を引用するのもどうかと思うが、たまたま鈴木商店破綻の直前、昭和二年四月一日の大阪朝日新聞が、新たに鈴木商店役員人事を報じているが、その一節に永井さんについて書いている。いささか茶化した書き方もあるが、当時の世論の断面をかいまみる興味もあるので左記してみる。

「永井幸太郎君◇鈴木の大黒柱（金子）直吉老が、あの蕨脱みの眼の中へ入れても痛くないのが、今度同店の常務になつた永井君である。彼が金子の秘書として如何に可愛がられたかはハタの見る眼も羨ましいほどだつた。◇俊敏な高畑に対し彼の特徴はむしろ鈍重なところにあつた。彼はよく大局を見るの明を有つてゐる。そしてあの複雑な直吉爺さんの頭の細胞を解剖する点において他人の真似はできぬ技



永井幸太郎氏

倆をもつてゐた。彼

は金子老の説の代筆者であり、また彼自身全く金子老の頭から抜け出て来たやうな説を吐く男である。◇今後の鈴木にとり、彼が高畑の欠くべからざる相棒であることは内外のと

もに認めてゐるところだが、ただ彼等二人の気合が合致するかどうか鈴木の前途を物語るとされてゐる。◇とにかく直吉爺さんの後に彼等があることは誰も承知のことで、遂にその日が来たまでのことであるが、ただ爺さんの眼の黒いうちにその日が来たのが、やや世間の興味を惹くだけである」

四

この鈴木的人事異動は、専務の金子直吉氏が辞任し、その後任に高畑誠一氏が、そして常務に永井氏が就任されたのであるが、これは瀕死の鈴木商店を何とか建て直そうとする台湾銀行の最後のテコ入れであった。つまり、攻撃型の金子直吉氏では到底この難局は切りぬけられぬと判断し、近代的センスを持った高畑・永井のコンビで鈴木をイメージ延いて経営陣も一新しようとしたのであったが、時すでに遅く、昭和二年四月四日の月曜日には支払いを停止され、鈴木は破綻し、日本経済の混乱もその極に達し、昭和金融恐慌の核心に入ったの

である。

この大事件も忘れられないことではあるが、私個人にとつても絶対に忘れられない思い出がある。それは、この鈴木商店破綻の前日の日曜日、即ち四月三日に私は現在の妻明子との結婚披露宴を神戸のトーアホテルで予定しており、しかもなおその月下氷人役を永井さん夫妻にお願いしていたのであった。当然のことながら、永井さんは鈴木商店危急存亡の時、金子氏や高畑氏と共に東京で足止めを喰ひ、どうしても行けぬと神戸まで電話があった。私としても勤務先の会社の重大事件であり、結婚披露どころではないと招待先に片っぱしから電話をして中止の連絡をとつた。かくして、私達夫妻は結局結婚披露宴も新婚旅行もやらないまま今日に至つてゐる。

五

さて先に引用した朝日新聞の記事にもちょっと触れてあるが、永井さんの文章は仲々ボキャブラリイが豊富で、格調の高い名文である。特に有名なのは大正七年の米騒動の際、鈴木商店が焼き打ちに遭つたが、騒ぎが一段落した後、世間の誤解を一掃するために鈴木商店の立場を正確に述べた「米価問題と鈴木商店」という論文で、米騒動の一面面を明確にする貴重なもので、永井さんの執筆に成るものといわれている。冒頭の文章だけ左に挙げてみよう。

「最近数年米価ハ異常ノ低落ヨリ異常ノ騰貴ニ急転シ為ニ曩ニハ農民ノ生存ヲ脅威シ、後ニハ國民一般ノ食料問題ヲ沸騰セシメ、政府及ビ憂國ノ士ヲシテ毎ニ之ガ調節ニ苦心セシメタリ、(中略)蓋シ鈴木商店ノ為セル所ハ政府ノ政策ニ順応シ或ハ其ノ命令ニ従ヒ進退セシニ外ナラザレバナリ。然ルニ世間ニハ之ヲ誤解シ曲解ス



西川政一氏

ルモノアリテ甚ダシキハ当店ノ行為ヲ譴^{ぎん}シ、事情ニ迂^{まが}遠ナル者ヲシテ怨ヲ当店ニ懷カシムルニ至レルアリ。八月十二日夜ノ変災ハ此等悪意アル曲解者ガ無辜ノ良民ヲ煽動シテ敢テ不善ヲ働カシメ憐ムベキ地位ニ陥レタルモノト云フヲ得ベシ。今ヤ民心冷靜ニ復シ吾人ノ云ハント欲スル所漸ク其耳ニ入り易カラントス。玆ニ米価調節問題ト鈴木商店トノ關係如何ナリシヤヲ事実ニ徴シテ闡明セント欲ス。之ニ依テ其ノ真相ヲ知ルニ至ラバ曩時ノ誤解者モ積然トシテ氷解スルヲ得ン

とあつて詳細にわたる鈴木商店の立場を説明している。この論文は経済学の先駆者として有名な一橋大学教授福田徳三先生が絶讃されたと聞いている。

六

鈴木商店の破綻後、永井さんは同僚の高畑誠一氏と協力し、関係銀行や財界筋とも話をつけて鈴木商店の商権の一部を引継ぐ新会社設立に奔走された。そして昭和三年二月八日、新会社の日商株式会社設立されたのであるが、これが現在の日商岩井株式会社の本ルーツであつて、設立当時の社員はたったの三十九名であつた。私も永井さんか

らお話があり、同志の一員に加わつたことはいうまでもないが、あれからもう五十幾星霜、当時の同志の中で生存者は永井さんを始め十名足らず、半数以上の方々が鬼籍に入つてしまわれた。

永井さんの文章といえはもう一つ是非紹介しておきたいものがある。それは昭和二十年十二月、敗戦直後の混乱の最も激しい状況の中で、日商株式会社の社内報に「貿易政策の構想に就き社員諸氏の意見を伺ひ度し」という長文の論文である。当時、高畑氏は日商の取締役会長、永井さんは社長だったが、このお二人が日商の指導者として混乱に混乱を重ねる日本の経済社会の状況をみて、それぞれ長文の論文を日商株式会社の社内報に発表された。高畑氏のものとは純理論的にこの非常事態における政府の財政対策、それも主として戦時補償について論じられたものであつたが、永井さんの論文は、あまりにも急激な情勢の変化にともすれば目先のことにまどわされ、貿易商社マンとしての本質的な問題を忘れ勝ちであつた社員達に、これからの商社はどうなるのか、商社活動はどう展開させるべきか、日本の貿易はどうなるのか、その呼び水をどうすればよいのか、そしてそれらを推進する心構えはどうあるべきか、等々、長期的な視野に立つて論ずるに呼びかけられたもので、非常に印象深いものであつた。

敗戦という私達が経験したことのない現実と直面し、虚無というか、虚脱というか、茫然自失の状態にあつた社員達に新しい気力をもたらし呼びかけであつて、日商の社員全員がああ困難な情勢を切り開く大きな指針になつたことは間違いない。

この永井さんの論文の一節に「貿易政策の観点より我邦工業の依存すべき原料の指定」という主張がある。これは永井さんの持論であつ

たアメリカの石油を援助か借款で輸入することが日本の経済復興の焦眉の急務というもので、この話が大阪選出の代議士一ツ松定吉氏を通じて当時の首相吉田茂首相の耳に入ったらしい。昭和二十一年の秋頃と思うが、私は当時日商東京支店長をやっていたが、永井さんのお伴をして首相官邸へ吉田首相を訪ねた。これは吉田首相の呼び出しであったが、永井さんはアメリカ石油産出量や日本の需要見通しなど説明された。この後すぐ、いわゆる傾斜生産方式という産業の重点指向政策がとられて石油輸入が具体化し、日本産業復興の第一歩となった。

これが契機となって永井さんは昭和二十二年二月、吉田首相に請われて貿易庁長官に就任されることとなる。貿易庁とは今の通産省の前身で、商工省の外局として発足し、最初は輸入食料の統制管理を目的としていたが、のちに全般的な輸出入管理を行なうようになった役所である。そういえば永井さんの貿易庁長官赴任光景はどんなものであったか、左は当時の社内報の記録である。

〔昭和二十二年二月十一日〕朝五時半、長官殿には西川東京支店長を従えられ、三宮駅ホームの階段で摩耶風の寒風を避けられることしばし、構内アナウンスは六時四分発上り東京行は八分間延着を報ず。正六時、ホームに上り乗車位置を求める折柄、またもアナウンスはこの列車は後部客車がすいていることを告ぐ。乗客と見送人とのどよめきの中に乗車列は乱れる。われ等もまた後方目指して走る。列車ははたなく到着した。

超満員という程にあらねどもデッキに立つ者多く、尋常にては乗れるべくもあらず。乗客は一樣に右往左往、窓より降りる者、窓より乗り込む者、そのあわただしさ限りなし。長官殿にも窓から乗るよりほ

か術なく、一つの窓より乗らんとすれば、憎や窓は内部よりピシヤリと閉された。発車信号のベルが鳴り響く。長官殿一行は未だ乗れず、見送人一同気はあせる。やっと一つの窓より降り立つ客と入れ替りに、西川支店長は長官を抱き上げるようにしてお乗せ申し、自らも直ちに乗り込む。見送人一同ほっとせる折柄、長官殿には懇切なる会釈を賜りつつ一路御赴任の途につかせられた。

何というお気の毒な門出であらう。世が世であれば一等展望車に乗り、多くの見送人の歓送の声に送られて赴任せらるべき長官殿が、今は窓より乗り込む三等車、しかもすわるべき席もないとは……」

あたかも爆弾三勇士よろしく、私が永井さんを必死に窓から押しこんだ光景が、今なお彷彿として思い浮かぶ。えらい時代であったが、永井さんは昭和二十四年二月、再び日商の社長に復帰されるまで貿易庁長官として活躍されたのである。

昭和二十九年、永井さんは社長の椅子をあつさり落合豊一氏に譲って勇退された。理由は高血圧による健康上の理由ということであったが、私もからみればまだまだお元氣そうで、もっともっと社長として社員を引っばっていたら良かった。しかし健康もさることながら、むしろ後進に道を開いて、フレッシュな若い力を注入しようという御意志の方が強かったのではないかと思う。とにかく永井さんは御自分の出所進退をはっきりされる方なのだから。

とにかく、永井さんのことを書こうと思うと、あれもこれも多くのことが思い浮かんで、私自身混乱してしまいが、ここにはその極く一部分を述べたにすぎない。願わくはこれからますます御元氣で、私達を御指導願いたいものと思っている。

(日商岩井鍋相談役)

祖父のお墓詣り

田 英 夫

(柏原)

郷里の皆さんには、心ならずも御無沙汰が続いてしまっていた。そんな折から昨年十一月十六日が、私の祖父、田健治郎が亡くなって五十年目の命日に当たるということで、昨秋、久々に柏原町へ墓参りで帰る機会があった。



田 英夫氏

柏原町小倉の山ぶところ、何本かの大きな杉の木に護られるような形で、祖父や一族の墓がある。墓石も、その周囲の土も、すっかりとコケに覆われていた。そこへ足を踏み入れたとたん、茶かっ色の小動物が、私の足もとを走りぬけていった。イタチであった。静寂(じやく)につつまれた、あたりの雰囲気は、まさしく地下に眠るにふさわしいものであった。そのすぐ近くにある家は、もう三百年近くにもなるということだが、

いまでもゆるぎない風情(ふぜい)である。古い日本家屋というものは、材料も、建築方法も、永い歴史と伝統の中で、日本の風土に合うように工夫されただけに、まことに堅ろうなものである。もう柱などは、木目だけが浮き上ってしまっているのに、材木としては立派に家を支えているのである。都会生活に馴れてしまっている私には、心が温まるような思いであった。

またこの機会に、幼いころに訪れたことのある、旧鐘ヶ坂トンネルをたずねてみた。これは祖父の兄、田艇吉が建設に努力したと聞いている。たしかにこのトンネルが出来て、はじめて神戸方面への道が開かれるまでは、柏原方面から「表」へ出るのは京都へ出ることであったのだろう。小学校へ入る前の思い出だから、もう薄らいではいたが、祖父と艇吉翁のあとについて、このトンネルを訪ねたときは桜が満開であったと思う。その桜並木も、老木は倒れ、すっかり少なくなっていたが、その跡に若い木が植えられていたから、またいつの日か往年の美しい花のトンネルが再現するだろう。古い鐘ヶ坂トンネルは、いまでは入口に金網が張られて閉鎖されていたが、いま見るとまことに小さいこのトンネルが、その昔の人たちにはどんなにか貴重なものであったのだろうとしばし感慨にふけた。

久しぶりの郷里は毎日を多忙に追われるように過している身には、近ごろ味わったことのない心の安らぎを与えてくれた。

(参議院議員・社民連代表)

はるかなる青春の日々

在 静岡 坂本 重雄

(柏原)

さる五月一七、一八日、柏原高校第三回卒業生(一九五一年三月末)の同級会に出席するため、二年ぶりに丹波柏原の地を訪ねた。四年ごとに関かれ、今回で三回目にあたる同級会は、三〇周年記念大会として半年前に予告されていたため、三三〇名余の卒業生のうち四〇%近くが参加し、幹事役たちの予想を上回る盛会であった。

この同級会開催に先立ち、卒業三〇周年記念誌の編集・発行が企画され、在郷の幹事会の御苦勞のすえ、B5判・一〇四頁の『記念誌―はるかなる青春の日々』が完成され、会の当日に参加者に配布された。卒業式のときに撮った男女別々の記念写真―顔がよくわからぬ位小さく写っている―があるだけで、今日では当り前になっている卒業記念アルバムなどというものを作製できなかった世代の私たちにとっては、その欠落を補う意味から大きな期待がよせられていた。

編集者たちは三〇余年前のクラス別、クラブ単位などのスナップ写真を三〇葉もあつめ、想い出の随想文を恩師や同級生からつものつめ、当時の学校の教育課程、通学状況、担任教員、生徒会機構図、

母校の沿革とその後の発展、柏高新聞(県のコンクールで一位に入選した号)などを収め、その必要経費は会員のカンパでまかない、一読して編集者の苦勞が伺われる記念誌といえよう。

太平洋戦争の末期、一九四五年四月に旧制の柏原中学、柏原高女に入学し、八月一五日に終戦を迎え、戦後の混乱期の学生生活を経て三年後に新制の柏原高校に編入学を認められ、さらに高校入試がなくて計六年間の学園生活を送った学生が大部分であることから、やや特異な世代の同級生であることは否定しえない。このようなつながりをもつ仲間が寄せあつた随想のなかには、戦後の物質的窮乏生活のなかで文化系、体育系の各サークル活動を通じて友情を深め合い自然環境に恵まれた想い出を回顧し、青春の日々における丹波の自然と人情に深く感謝する趣旨の文章が多い。

入学試験にわずらわされず六年間の同窓で育つたことによる親密さと信頼感、丹波に生れ育つた人間に特有の質実剛健を、さらに疎開を契機に丹波に移住し仲間となつた友人たちのもつ都会的感覚をも加味した進取の気風が、それぞれの文章の行間にあふれ、三〇余年の歳月の経過をしばし忘れさせるものがあつた。このような記念誌の発行を企画し実践してくれる在郷の友人、その呼びかけや期待に応じてくれる同級生がいてくれることもまた大きな喜びである。

(一)

ところで、その後再び自分の生活と仕事の間にもどり、一九八一年の正月元旦を迎えた私にとって旧年五月に感激して参加した同級会、そこに結実した記念誌とは一体何であったのかと再考させられ

る。人間社会における疎外意識が深まっている今日、ささやかなりとも連帯感を確認する場の一つとしての同窓会を評価しながらも、まだ当分は現役の働き手であるべき我々の世代が「はるかなる青春の日々」の回顧にとどまっていたよいわけではない。日本の国、日本人がその国際的感覚の欠如を批判されている国際情報化時代に、世代論、丹波人論などにこだわっているのはどんなものかという皮肉なつづやきがどこからか聞えてくる。

最近の防衛論議、戦後の民主主義を疑う論調の評論家たちが、私などより若干年長の昭和一ケタ世代であることは、戦時体験が必ずしも絶対的平和への希求とは直結しないことを物語っている。戦争のない青春時代を謳歌したものの、「平和は何ものにもかえがたい」という信念は次第に風化しており、物質的繁栄と引きかえに「人間の尊厳」は失なわれているのではないかと不安にかられる昨今の状況である。



坂本重雄氏

最近、ますます素直で子供っぽく感じられる大学生たちから、「太平洋戦争はなぜ防げなかったのですか。いま平和を守り戦争をさげるにはなにをすればよいのですか。」と質問されて、教職にある私自身はまだ説得力のある回答

を準備できていない。心のなかでは、「戦争への危険がどこからどのようにはじまるのか、人間の生活経験や歴史の研究・学習からある程度まで理解できるはずだ。ただ、危険の芽生えについて鈍感なのが人間の常であり、まわりの流れが急に速くなるとせきとめられず、独りで流れにさからってみても無駄におわるのではないかとついで逃げ腰になってしまふ」などとつぶやいている。このつぶやきの論理を克服して、若い世代の人びとに向って、「人類の平和、それを基本的条件とする人間の尊厳」を保持するために、いまだのような努力が必要不可欠であり、それを可能にできるかを説得していきたいと念願しております。

(静岡大学教授)

『山ぐる』と石橋社長

在 静岡 永井 勇

(市島)

『出身地はどこですか』

『兵庫県のあのデカンショ節の山家のさるですよ』

こう答えることが多い。

わが社の先代社長石橋治郎八氏は、三代目安藤広太郎農業博士のあとを継ぎ、四代目関東水上郷友会長として、その発展と親睦に寄せられた事は周知のことです。

亡くなられる三年前『永井君、今度郷友会誌を出すことになった

石橋治郎の筆蹟
治郎 記念 石橋



(左) 石橋治郎八氏の筆、(右) 若きときの石橋社長の似顔

よ、その表題を己が「山ざる」と決めて書くことにしたのだが、なかなかうまく書けなくてね」と話された。

『それは良いことですね。』と答えたが、なるほど丹波人を象徴するが、むしろ御本人石橋治郎八社長の風格と性格をまる出しの名だと、感謝した。のち会誌の「山ざる」の字を見てまたまた驚歎せざるを得なかった。「これが八十幾星霜夢と斗いで生き抜いた人の字だ」と!

石橋社長が工場へ来られると聞くと、その日は朝から飯がうまくな
く、何を言い出されるかと戦々恐々、工場へ一步入るなり怒鳴り散ら
す、ワンマンそのものであった。何時も型の崩れ落ちた実印一つでど
れだけの資産を作り上げたか解らぬと思えるほど擦ら減った貫録ある
印鑑を肌身はなさず持ち歩いていた。重要書類に個人の署名捺印を仰
ぐと、まさに「山ざる」の書体そっくりに、石橋治郎八と署名されて
いた。

人として幾星霜を経てその重み深み、佗び、寂び人柄が文字そのも
のに残っており、なつかしく、身のひきしまる思いで会誌の届く度に
拝見している。野蠻と思える程の気骨と忍耐、万全の智慧を働かせな
がら事に立ち向い必ず成就せしめる。これが丹波人(山ざる)の文字
と解したい。

(石橋絹業KK、取締役工場長)

☆

☆

幼年の頃春日町黒井の実家が破産の憂き目に合った少年の頃、裸一貫で丹波をとび出した。何が何でも一家を再興しなければならぬ、との宿願を常に抱きつつ、今日の石橋生糸を作り上げ、丹波出身の実業家としては、希代の資産を築いた奇人豪傑とも思える人であり、まさに野人(サビシ)山ざるそのものであったと思います。(この項昭和三七年わせた書房出版自叙伝『シルク紳士まかり通る』参照)

「山ざる」退治作戦

畑 正義

(春日)

一、春日町で百余を生捕る

水上郡では以前には「山ざる」は生棲してはいなかったが、昭和四十五年頃から被害に悩むところが出だした。

春日町も初めは「丹波篠山山家のざる」で有名な篠山町その隣りの西紀町の多紀連山から数匹が姿を見せかけていたが、毎年その数がふえ続けていた。このため西紀町に隣接する春日町元大路村野瀬部落を中心に野菜、果樹、稲など年間約一千万円以上の被害が出ていた。

(挿入の同町地図を参照)

たまりかねた春日町では、約十年前から捕獲作戦に取り組んでいたが、昭和五十四年から、町役場産業課を中心に本腰をいれて真剣な態勢で臨んだ。

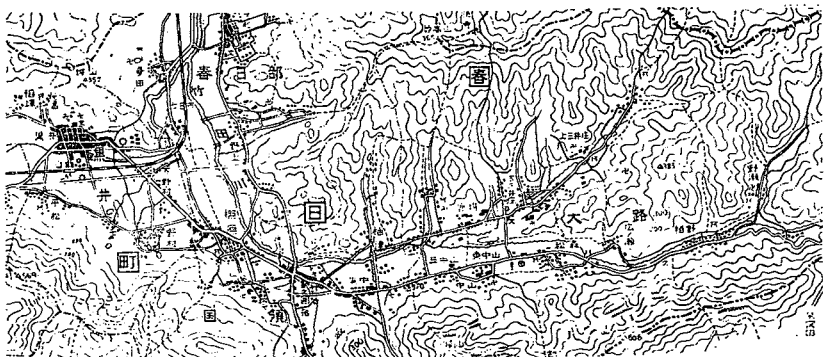
初めは「餌づけ作戦」を鳥取・島根の先進地？（何にでも先進地があるもの、ハハー）を視察し研究を続けて来たが、昨夏頃から愛知県大山市の日本モンキーセンターの指導で餌づけを研究、春日町全域からの協力を得て、大豆、サツマイモ・果物などを集め、野瀬の観音寺の上部の奥山に餌づけを始めた。

同町近くの兵庫県立自然公園の内、多紀連山には、四、五集団（約五百びき）の山ざるが住みつき、百びきを越す群れが現れ、どの群にもボスがいる。それらがエサ場に入出入するようになったので、本年一月に、オリをつくり、チャンスをねらっていた。

一月下旬に、エサ場には好物の大豆などをまき、呼び笛を吹くと付近からサルが群れが次々とオリの中へ入る。入りきったのを見すまし、モンキーセンター職員がオリの四か所の落下式とびら

をガチャンと落した。もう絶対逃げられない。早くからサルと顔見知りとなっていた同産業課職員。サルはこの職員に

春日町の地図





サルと大の仲よしの荻野正さん

出逢うと、白い歯をむき出し「イイッ」と人をからかう。職員も。また「イイッ」とやり返すなど、大の仲よしとなっていた。その職員ら約十五人がオリのなかに入った。こんな筈などはないと思ひこんでいたのに、キャツ、キャツと逃げ回るサルを追いかけ、たも網で一匹づつ捕まえて箱に詰め、同センターへ送った。

その捕獲オリは広さ約五百平方メートル、オリの下部高さ約一メートルは金網、その上部約三メートルは生子板で、登ってもすべり落ちる仕かけのもの。

二月二十二日、午前九時過ぎ、九十四匹の大群を捕獲するのに成功。更に翌二十三日には残りの二十四匹、計百十八匹を捕獲したという次第である。

二、郡内の動物棲息状況

ところで動物の生棲は周期的であるが、拙著『多利の郷土誌』から水上郡内の動物の棲息状況を披露しておく。

サル 野猿の集団が見られたことはない。

イノシシ 昭和八年頃から出始め、四十八年から山すそ全部にトタン板の防護柵を設けてから、どうなったものか出なくなった。

シカ 明治にはたくさんすんでいたようだが、今は全然見られない。

とあるが、近年では市島町旧美和村の五台山、小野寺山や旧前山村などには棲み、植込みの栓の若芽を喰い荒らし困っているという。奈良春日神社の鹿の角切りも、投げなわで捕えていたが、本年から麻酔銃もシカたがないと、文化庁で許可。

キツネ・タヌキ・アナグマ 近年、山が人工的に荒らされ、その住家がなくなりなくなった。

テン・イタチ 最近は見かけなくなった。そのよい餌のネズミがいなくなったためか。

ネズミ 家ネズミはたくさんいて、一匹のネズミを見れば十五匹はいるといったもの。昭和四十七年から一匹もいなくなった。

野良ネコ 毒物を与えられてフラフラになったネズミを食った猫がよく死んだものだが、ネズミがいなくなったためかノラネコが増えて、家の戸もあけておられない現状で困っている。

(筆者は元春日町長)

日本舞踊ひと筋(中)

日本舞踊家 西崎 祥

(相原)

一、山田先生を訪ねる

承前上京した私は、西崎みどり先生が紹介者なしには弟子をとられないことを聞き、ある知人の紹介を得て、西崎先生と懇意でおられた作曲家山田耕筰御夫妻をお訪ねして、入門のお願いをしていただくことになった。

山田先生は当時七十歳を過ぎ、運動神経マヒ症により、左半身不随という御不自由なお身体でおられたが、大変にお元気であった。静かな田園調布のお住



西崎 祥さん

いには、広い芝生のお庭一杯にバラの花が咲き乱れていた。先生は始終ニコニコなさって私の希望を聞いて下さった。そして入門のことも快く

引き受けて下さったが、私がいずれは内弟子になって修業したいのと申上げると、

『西崎さんは堅い学者の家で育ち、教養もあり頭も良い。舞踊家としては良いと思うが、忙し過ぎて内弟子を躰ける迄は、とても目が届かない。それに感心しない事情もあるので、何も判らない若い娘が内弟子に入ることには賛成出来ない。修業がしたいのなら僕が責任もって躰けて上げよう。うちから稽古に通えばいい。まず都会の生活に慣れること、そして何でも欲を出してどんどん吸収しなさい。また人を使う者は、まず自分で使われてみるのが一番良いし、世間で一流だといわれている芸術家の生活を見ることが勉強だ、表面だけでなく、台所のやりくり、使用人の問題、経済面など、何ごとも踊りの榮養になると思っただけなさい。みんな自分の為になるのだから、僕も若い時には石井漢や猿之助に踊りを教えたこともあるんだよ。踊りのことも判っているから安心して、まかせなさい。就職して勉強するより将来の役に立つと思う。うちで二年辛抱出来れば何処へいっても大丈夫だから。』

と自分の手元で修業することを勧めて下さった。私もその様な苦勞こそ望むところであったし、西崎先生の弟子にさえなれるのなら、どんなことでもと決心していたので先生のお言葉に従うことにした。

そんな訳で有田先生のせつかくのお骨折りが無駄になり、母は辛い思いで就職を断りに行ってくれたのだった。

二、住込み

そしていよいよ本格的な私の修業時代が始まった。



山田耕祥先生 (70歳の頃)

無口で頼りない私は、生れて初めて、他人ばかりの中に身を置く不安と心細さで夜になるとホロホロ涙を流していた。朝は六時から夜は十二時頃まで、自分の時間というものは全くなく、緊張の連続だった。秘書の人以外は住込みで、運転手に爺や、女中は常時三人位(続かない人が多かった)。

その人達に可愛がられるように気を使いながら、何でも教わって夢中で働いた。しかし、他人に使われたことのない私はただ淋しく、何も出来ない自分が惨めで、とんだ見当違いの所に来ってしまったのではないかと思われた。

覚悟はしていたものの、やっぱり私の考えは甘かった。どんな恥をかいてもいいから逃げて帰ろうと、その事ばかり考えていた。やっと夜中の十二時頃になって本でも読もうとすると、『灯りが漏れるから

消しておやすみ。』などといわれ、好きな本さえも読めないのかと何かにつけて悲しくなるのだった。声楽家でおられた奥様からは、家庭内のことは勿論、言葉づかい、電話の応答、礼儀作法、来客の応待などこまかく教えられたが、まるで気の利かない田舎娘を仕込むのは、さぞ手の掛ることだったに違いない。私も「さあまず言葉」を使わせるのには閉口した。

先生は、お若い時の外国生活で身についた超一流の合理的な生活様式を几帳面に貫かれ、決して崩されることはなかった。御不自由なお身体であり、高令であられたにもかかわらず、身嗜みはおしゃれで若々しく、身の囲りのものは全て最高の品物を揃え、それを大切に愛用されていた。しかし使用人の待遇などは、今の時代と違って相当悪く、食事などもお粗末なものには驚いた。奥様のやりくりも、かなり大変だったようで、年中銀行をとび廻っておられたし、私もお供をしてそれらの御苦労をいつも見せられていた。しかし、そんな様子は微塵も感じられない程、気品高く優雅な生活を維持なさっていた。

三、しつけ

先生は御気性も完璧主義で些細なことでも、決していい加減は許されず、でたらめとか、中途半端ということは絶対に嫌われた。誰もが気付かないほどの僅かな額の傾きを指摘なさる等、絶えず鋭い神経で物事を見ておられた。

私共に叱る言葉は穏やかだったが、それが却って欠点を見抜かれていて、心に強く滲みるのだった。

『頭を使いなさい。頭は使えば使う程よくなるんだよ。』

『気の利かない女は駄目だよ。』

『真心が入っていないナ、何でも誠心誠意心をこめて……。』
などと注意された。御自分で

『以前は気が短くて、よく人を突き飛ばしたから罰が当って半身不随になっちゃった。』

とおっしゃっていたが、先生の人一倍気難かしい御気性を呑み込む迄は、緊張し過ぎたり、焦ったりで、却って失敗をし、笑われたりして気に入られず、不器用な自分が情けなくなるのだった。殊に御気嫌の悪い時には、お茶一つ入れても、熱過ぎる、濃過ぎる、タイミングが悪い、真心が入っていない、等と文句をいわれた。そんな事が続くとも、すっかり自信をなくして、今度こそ止めてしまおうと真剣に思うこともあったが、ここで我慢が出来なくては踊りも出来なくなるんだといつも自分にいい聞かせ、何とか思い止まっていた。

その反対に、御気嫌の良い時は冗談ばかりおっしゃって、人を笑わせたり、からかったり、美味しいものを沢山買って来て下さるなど、苦勞人であられたので、思いやりが深く、人の心の中をよく見抜かれるのには驚いた。私が踊りの稽古で、西崎先生にぼろくそに貶され、すっかり希望を失って帰った時など、いつもより優しく迎えて下さって、御自分の苦勞なさった頃の話をして下さるのだった。

四、修業

『車引きでも、お客が喜んでお金を払ってくれるようになる迄は厳しいものなんだよ、自分で工夫して腰と力のバランス、走るリズム等を体得しなければ文句ばかりいわれて、お金ももらえなかった。何で

も一人前になるには大変なんだ……。』

そんな話をして、私の挫折しそうな心を紛らわして下さることもあった。

週二回の稽古日に、その日の都合で稽古に行けず、その事を私が不服に思っていた時など、お庭を散歩しておっしゃった。

『稽古場に行って習うだけが勉強じゃない。自分以外のものはすべて先生なんだ。ほら蝶が飛ぶのを見てごらん。燕ツバメや雀とも違うだろう。目で追うものでも全部表現が違うわけだ。風や雲、花の散り方にも違いがある。自然のものは何でも芸の役に立つ、いくらでも勉強出来るんだよ。』

先生のお供で出掛ける時は、いつも前の座席に乗るのだが、黙って座っているのでつい眠くなり、コックリコックリしてしまった。先生は後の座席で笑いながらおっしゃった。

『若いのに居眠りしてちゃもったいないよ。外の景色、街の動き、人の表情、何でも観察しなさい。六代目はね、年寄り、物売り、びっこの人や乞食まで外を歩いている人を見て研究し、自分の芸にしたんだよ。』

天下の菊五郎をもち出されたのには、怖れ入ったが、このようにして日常の心構え、ものの見方感じ方、勉強の仕方というものを、折々に教えて下さるのだった。

五、山田先生と文化勲章

情熱家であられた先生は、御自分の音楽故に、はからずも肉身の縁に浅く、内心はお寂びしかったに違いない。嬉しい時、悲しい時、黙

つて目に涙を溜めておられたのを、何度が見かけた。先生の涙で思い出すのは、昭和三十一年文化勲章を受賞なさった時のことである。それ迄何度も候補になっていて、その年に確定の報らせが入った日、一緒に帰宅すると玄関先に御祝いの大きな花籠が飾ってあった。西崎先生から届いたもので、『さすがに緑さんは機転がきく。』と感心なされ、お喜びになった。それから方々から沢山お祝いの電話が鳴り、そして十一月三日、晴れの受章式、皇居から奥様と晴着で戻られた先生は、まっすく書斎に入られた。私たちも、お祝いにみえた方々と、祝杯の用意を整えて広間で待っていたが、先生はなかなか出て来られない。あまり遅いので私が

『皆様がお待ちになっていますから。』

とお迎えに入っていくと、先生は一人で泣いておられた、お母様の写真の前に立ち、目に一杯涙を溜めて。永かった年月のことを心ゆく迄、御報告なさっていたに違いない。

食通で知られた先生は、人に御馳走するのがお好きで、自宅に招かれては、お得意のビール入りのすぎ焼など味つけして、すすめていらしたが、お気に入りの店にもよくお出掛けになった。天ぶらは上野の『山下』お寿司は一ツ木の『穂づみ』、『おつな』のお稲荷さんもお好きだったし、中華料理は、田村町の『三六九』とか『中国飯店』うなぎは登戸まで遠出なさったし、おそばは『吉田』とか『更科』などへ行かれた。それに奥様が、赤坂松町にあった、もとのお住い、旧山田邸で、会員組織による「くらぶ南風荘」(南風は先生の号)という長崎料理の店を経営なさっていた。最初支配人の山本キミ子さんが、良いお客を開拓されたらしいが、当時は、酒井美意子さんがみえていた。

お料理の総指揮は奥様の実妹で、料理研究家の榊子さんと、板前もお弟子の女性ばかりで、繊細な季節感溢れる献立によるフルコースを、赤毛毯を敷き、丸卓を囲んで食べる「しっぽく料理」であった。お酒がまた、先生のお気に入りである「岸の竹」という灘の銘酒を、夏は冷酒にして召し上っていた、この「くらぶ」の玄関には「日本楽劇協会」の看板が掛っていて、音楽関係の会合や、来客の接待によく使われた。そんな時先生は驚く程お料理を召上って愉快な話題でお客様を笑わせておられた。

六、南風荘で来客接待

私はこの南風荘でもいろんな仕事を手伝った。奥様には『何でもあなたの為になることだから、有難いと思って何でも覚えなさい。』とハッパをかけられ、お座敷から調理場への連絡、お料理のお運び、帖場の仕事、時には仕入れのお供で魚河岸にも、その他、会社へ集金にいくなど手伝うことは沢山あった。

西崎先生も、御自分の著書「舞踊のあけくれ」の『味なものの歩き』の章の中で第一番に取り上げて書いておられるが、乃木神社に近い閑静な高台にある邸宅で雰囲気の良いのと、お料理が気に入られ、有名な方々が多くみえた。

応接間の他は純日本建築で、小砂利を敷つめた心なごむ庭園には、先生御自慢のお稲荷神社もあって、朔日ついたちには必ず神主の祝詞とお祓らいを揃って受ける慣らわしがあつた。先生は神様の他にも、占いや易を信じられたり、縁起をかつがれるなど意外と古風なところがあつた。若かつた私には、とても面白い一面をみるおもいであつた。

ここのお部屋は各々に「からたち」「この道」「赤とんぼ」「待ちぼうけ」「砂山」等と名札がかけられており、床の間の掛け軸は先生の筆で

「薔薇の木に薔薇の花さく

なにごとの不思議なけれど」

「一人居はさびし

されど三人居はなほさびし」

などと書かれた軸がかけられていた。

西崎先生も、大変ごひいきで公演のたび毎に、共演者やスタッフなど、よく招待なさっていたし、忙しい仕事の合間に、藤原義江さんや、砂原美智子さん等、お友達とお食事にみえたり、意中の方とお忍びでみえたりなさった。いつも稽古場では、震え上る程恐しい先生なのにそんな時の先生は生徒の前では決して見せることのない、女らしくてやさしいお顔をなさっていて、まるで別人のような先生に接することが出来た。先生がみえると私はすすんで接待させてもらったが、先生は必ずお客様に

『この子は私の愛弟子なのよ。』

とおっしゃって下さって、何かと用をいいつけて下さるのが、とても嬉しかった。この緑先生が晩年、たった一人でお客様を待つ間、暮色迫るお庭をぼんやり眺めておられて、お茶を持って行こうとした私^が、あまりの静けさを壊したくなくて、一瞬足を止め、しばらくそつとしておいて差し上げた、その時の、先生のお寂びしそうだったお顔^が、今も私の目に残り、忘れることが出来ない。そんな緑先生の想い^出を、次号で綴ってみたい。

スイス「グランボー村」訪問記

伴 仲 信 次

(春日)

五十余年の昔(昭和三年)私が二十二歳から二十四歳にかけて設計監督をして建てた近藤男爵邸が、戦後スイス国大使館として使われていましたが、時代の流れとともに取壊しの運命にあった一昨年、奇しき縁に結ばれて移築され、千葉県長柄ふる里村及び真名カントリークラブのコミュニティーセンターとして蘇生したことは「山ざる」第十号に書きました。

時のスイス国駐日大使ビエルクエヌー氏もこの事を大変によろこばれ、グランボー村との姉妹村の縁結びの勞をとられました。すなわち一九七九年七月三十日に日瑞両国大使立会のもとに締結の調印式がおこなわれました。

そして昨年十月二十日の「ふる里村」開村式にはフロロン村長を始め村の代表五名か参加され、三千数百名の来賓を迎えて賑々しくオープン致しました(山ざる第十一号 ふる里村開村記 須原清氏記を参照)。

今回はその答礼としてスイスのグランボー村を訪問することになり、ふる里村代表並びに有志一行二十三名と共に十月十九日にグランボー村を表敬訪問致しました。

グランボー村はヴォー州首都ローザンヌより車で四十分程に位置し、レマン湖畔の丘陵地で、村全体がブドー畑でレマン湖の景観が最も良い処といわれており、先年天皇陛下もこの村を訪ねられたということです。スイスの代表的な農村とのことです。

訪問当日はローザンヌのホテルに村長はじめ有志が早朝よりバスを馳って迎えにこられた。道々案内をしていた村中央の広場に着き多数の村民や青年達の演奏する楽隊に迎えられました。

まず葡萄酒の工場、倉庫を案内され、説明や試飲などして村牧場に着きました。

スイス連邦国駐割、岡田晃特命全權大使ご夫妻も到着されて会議室において交歓を行いました。

村で唯一のホテルに於て昼の正養メニューによる饗応を享け、午后は十数軒離れた処にある十三世紀頃に建てられたエーゲル城に案内されました。この城は民族資料館として公開されており、大変興味深く見学しました。

夜の食事の場所は地下二階の一寸変わった処で馳走になりました。周囲の壁も天井も岩肌のままの数十坪の穴倉のような処です。あちらではごく親しい人をもてなす時に使う場所なのだそうで、姉妹村調印式もこの場所で行なったとのことでした。

聴くところによるとスイスでは爆撃、特に原子爆弾に備えてこんな場所がアチコチに造られているとのことでした。ここでの晩饗はスイス独特のチーズホンジュールをメインとしたもので、本場で喰べるチーズホンジュールを何の抵抗もなく舌鼓を打って食しました。土地特産のワインとよくマッチしているせいかとも思います。

終日夫人同伴での飲待を受けて一同満足してホテルに帰ったのは十時を過ぎておりました。

翌日はわれわれが返礼にご招待して、夜の十一時まで食事や飲談に過し、尽きぬ名残りを惜みつつ再会を約しお別れしました。

今回の訪問で姉妹村として今後のあり方について具体的に話し合いが行なわれたことを成果に、その実現に努めたいと期している次第です。

スイス国について

スイス国の面積は我が国の九州全域に匹敵する広さで四千メートル以上の山は三十九と、国土の半分以上を山岳が占めています。

人口は約六百三十万人で、言葉はフランス語二〇%ドイツ語七五%イタリア語四%土語一%と四つの国語の国で、同じ国民でありながら意志の疎通には通訳が入らないと通じ合わない国柄でテレビの映像にも仏語の放映には独語、伊語の文字が同時放映されています。



晩餐会右より伴仲夫妻とグランボー村長夫妻



グランボー村の風景

帰ったことを記して今回のスイス訪問記と致します。
 (春日建設KK社長)
 五五、一二、二三記

この事実が示すように、言うなれば四つの国が寄り合って連邦国を形成しているような訳です。同一民族で同一の国語を持つ日本、国内何処へ行っても話を通じる我々は大変恵まれた国だと痛感しました。この異なった国語を持った異民族の集団とも言える国民がスイス連邦国を形成し、しかも世界でめずらしい平和国家として安定している事実は全く驚きです。しかも、国民皆兵の制度のもとに常に不測の事態に俱えて軍事鍛錬をなし、又原爆等に供えて各所に避難壕を造っている事実、核戦争によって世界の人類が滅亡してもスイス国民だけは生き残るとの信念のもとに万全の構えを持ちながら、日々は平和な否世界で一番安定した国として発展している姿を目のあたりにして、今の日本はこれで良いのか!!と、大きな壁に打ちあたった思いを抱いて

懸命に生きています

林田 孝子

(柏原)

ふるさと柏原小倉の家を出してからおぼつかない足どりで、六十年を経ました。いろいろの事がありました。病気だけはせず。ただただ私なりに働きつづけてまいりました様に思います。

おかげ様で三男一女の母となり、長男は東大を出まして、今日お茶の水女子大学の数学の教授を勤めております。二男も三男も慶応大学医学部を出ましてその道に励んでおります。

娘も立教大学を卒えて横浜戸塚に家庭を持って平和に暮しております。これが私の家族構成で御座います。

私共二人は老後の為に日当りのよい所を



林田孝子さん

と、この横浜に七年前に家を建てました。主人も来春は八十六歳になります。元気で毎日の散歩、その外に週二回の病院での診療におつとめをしています。私は家事の外に家の廻りの庭と申ししても、ささやかなものですが、小さな花壇、狭い芝生、畑などの手入れにいつも、いつの間にか二時間―三時間を過ぎてしまします。

足腰も痛くなりますのにやめる事が出来ません。種を蒔き、芽が出る、可愛らしい花が咲く、お野菜が成長する。あたりまえの事ですのに私の心に深いやすらぎとよろこびがあるのです。愛情が湧きます。笹ばかりだった荒地も少しづつよくなりました。色々の植物を植えました。七年をかえり見ました今日、柚子が黄色い実をいくつもつけ、隣りには大きくなったピラカンサスや千両が赤い実を一杯つけて

私のふるさと今昔

木村 つたゑ

(市島)

去る十月十七日付の朝日新聞家庭欄に、氷上町上新庄の足立ますさん(九十四歳)が、村の幼稚園児の為にワラぞうりを作って段ボール箱にたくわえておられる話が、にこやかな写真と共に掲載されているのを見て、何とも懐しくすぐにもとんで行って自分も作ってみたくなつたものです。

呉れました。一人悦に入つて眺めています。家の中もペランダも一ぱいの鉢植です。月下美人もごきげんで今年も大きな立派な花を咲かせました。これからはシンビジウム、デンドロ、小さな洋らんも可愛い花芽をつけています。

同窓の菱田様にお誘ひ頂いて始めました書道はなかなかむずかしいので上達はいたしません、お互いに励まし合ひましてもう十余年も続けております。大切なお友達だと有りがたく思っております。

いつまで続きますか命やらと思ふ事もありますが、一生けんめいに生きて行き度いと思ひます。

氷上郷友会の御一同様の御多幸と『山ざる』の御発展を心からお祈り申し上げます。

私が東京に住んで約五十年になろうとしています、五十年前の丹波地方、特に旧鴨庄村は殆んどが小規模農家で農業収入だけに頼つて暮らしていたせいか、貧しく、その上子供が多く九人十人も珍しくない状態でした。私の姉のクラスには女の子は義務教育も終えない十歳そこそこで、製糸工場や紡績工場に女工として働きに出て親の家計を助けていた子供も幾人かいました。その後数年を経て、次のような歌が村の娘等の間で口ずさまれるようになったことを覚えて、います。

製糸工女とあなどるな

末は博士か大臣か国会議員の妻ですよ。

せめてもの悲しさをこらえるささやかな抵抗の歌だったのでしよう。私の実家は一町歩余りの自作農で祖父も父も「木びき」を副業にしていたようですし、母は農作業のかたわら蚕を年に四、五回も飼育

していただきましたので十一人の大家族でも何とか生計が立てられたのだと思えます。

私とすぐ上の姉とが一番よく手伝われたものです。桑つみは登校の前の仕事、草履作りは学校から帰るとすぐ祖母と一語に始めるのです。最初は藪打ちばかりでしたが、一足二足と作るうちに祖母より上手に作れるようになり、自分の作ったのを学校に大いばりではいて行ったものでした。その頃の農家では殆んどが自給自足だったように思います。まして母は、とてもまじめな人でしたから味噌、醤油、こんにゃく、豆腐、酢、漬物類全部が自家製でした。

桑取りの時にはよく注意されました。桑の木の間にこんにゃく芋が見られない枝を広げているのを痛めないようにと、最近になって知ったのです。こんにゃくの芋は四、五年経なければ掘り出せないのだというので全く不勉強なことでした。燃料も全部秋口に用意していました。山畑のすぐ上にある炭焼きがまで炭をやくのは祖父の仕事で薪を木小屋に貯えるのは父、私と祖母は「こくばかき」(落葉がきのこと)と、決っていました。昨今どうしたことかあの裏山でこくばかきがしてみたくて仕方がないような衝動にかられることがあります。これも年のせいかもしれません。

故郷を出てから半世紀を経ると、村も大きく変わりました。目でみた限りでは、ワラぶき屋根は殆んどなくなり、きれいな庭のある重厚な感じの瓦ぶきの二階家が村のあちこちにみられ、中には鉄骨のモダンな建物もチラホラ、道は全部舗装されごみを焼く近代的な焼却炉さえ出来ているのです。そして、各家庭にはカラーテレビをはじめ家庭電気製品が行きわたり、農作業もすっかり機械化されて昔のように庭一

ばいに箆をしてモミを干すなどの手のかかる仕事は何一つありません。そして余った時間は主婦もパートに出るか、縫製などの内職をして現金をかせいでいます。子供も多い家で三人位、大ていはい、二人で車は一軒に一台は必ず持っています。必要にせまられてかとも思いますが、自転車でも用が足りるのではないかと考えるのはよそ者の「ひがめ」でしょうか。

あれもこれも、昔が懐しいのですが、さて「老後をふるさとで住んでみるか」と問われれば「はい」とは答えられません。何故でしょうか。老いてまでも真の自由を束縛されたくないからです。私なんぞは村に入ればまず一番に村八分にされそうな気がします。故郷の人情や習慣が昔と余り変っていないところがいいようでもあり、またいやな一面でもあるように思われてなりません。やはりふるさととは遠きなりにて想うものようです。

今の幸せを感謝

音無 太美子

(春日・黒井)

新聞の投稿欄などに出ている見知らぬ人に親しみを覚え、老婆心と云うのか、共感や意見を交換して文通が始まり、仲良くなってお友達が多く出来ています。これは反対にですが私の或る載りました文を読まれ質問下さり、そのあとの文通でノイローゼがなおられ明るい良

い奥様におなりで、今年はじめてお会いした時は抱き合つて喜んだ事もございます。

今日ムラムラつとおせっかい心をかき立てたのは、「四十路になつたが満ち足りた生活で、何か資格か勤めなど考えもするが、気力体力の衰え感じどうしようもない空しい日々だ、でもこの平凡が幸せなのだろうか。」という文です。読み返すほど放つておけない気になり私の経験から書き出しました。

夫に死別の私、もつともつと夫を立て、専心尽すべきだったのに就職して、子供にも寂しい目もさせ家庭の潤いが足りなかつた後悔の事実。生活のため勤めねばならない人からは、充二分に誠心誠意尽せる貴女の境隅は羨ましい、家事育児の主婦業も立派な生き甲斐ある仕事です。が望みなら御主人に相談の上何か資格を取られるもよし、或いは御主人お子様が賛成なさり適職あれば、時間的に家庭第一の外れぬ就職も良しと、私の経験や職場の特に女性の覚悟等もまじえて書きました。

それから私が老年迄勤め過ぎたきらいで今になってから六十の手習い色々あざさっている処には二十台から六、七十歳と年齢層も広く、趣味により良い友達も多く社会も広く知る事も出来ます。以上の何かに積極的に出掛けられては如何ですか。衰え感じるとか空しいなど暗い事は決して思つたりいったりせぬ事、そんな表情、態度は大切な御主人の憩いの場である家庭に禁物です。何卒御主人を立て従い「明るい笑顔のお母さん。」でいて下さい。家庭の明るい、暗いは主婦の笑顔の量によるといわれますね。そして笑いや明るさが幸せをよびよせる事は確かです。みんな「心」からのようでも自分は運の悪い者

だと心にきめている人には好運は寄りつかないようです。どうぞ御主人に色々な面感謝なさつて張りのある明るい奥様でお暮し下さるよう」とお願いしました。

はずかしい私の悪趣味の一端を消息のかわりにさせて頂きます。皆様のきびしいご意見お聞かせ下さい。

夫を偲びまして 三首

亡き夫のおもひ出返る救急車耳をふさぎてすぎ行くを待つ

角力好きの夫に見せたく秋場所のテレビを遺影の額に向けたり

「仲々よく出来たじゃないか」馬鈴薯を堀りいて亡夫の声のまばろし

御夫婦お揃ひの方々へ——今のお幸せをかみしめお互いを感謝なさつてくれぐれも御主人を、奥様を御大切に心よりお願い申し上げます。

本の紹介

最近、丹波や水上郡に関係のある著作が続々発刊されて、ふるさとに関する関心が高まっている。そこで、それらの中から手に入れた本や、パンフレットで送られたもの二、三を紹介し参考に供する。(松)

(一) 続『写真和田村史』

——植木環山先生伝——

幕末期、但丹に三名の著名な学者が傑出して教育事業、地方文化に

貢獻しました。但馬聖人といわれる池田草庵先生（八鹿）・柏原藩儒小島省齋先生（佐治）それに自由人植木環山先生（和田）の三人。とくに植木先生の場合は再三要請のある播州の池田藩儒仕官を遠慮して自らは権力から遠ざかり藩祿をたのまず自由と貧乏を共にしながら家業の医を施し、傍ら求めに応じて書を以て生計の資とするなどして学問と子弟の教育に専念しました。しかもその書は往来交友厚き頼山陽に次ぐとも劣らぬ能筆家とされ、遺墨も多く、また単に環山先生一代にとどまらず、植木家五代約二〇〇余年にわたる長い儒学者、医院、教育家家系として地方文化と学問奨励の風土を培われました。

このような和田の傑出した人物伝を『続写真和田村史、附、植木環山先生伝』として出版。尚、環山先生は日本水産の創立者故植木憲吉翁や現植木伍鹿氏の祖父。申し込み先〓山南町役場、木戸源治郎宛

◎主な内容 1、植木環山先生と郷土文化―木戸源治郎 2、植木環山先生伝及遺作集―中岡朝一 3、植木環山小論―村上白山 4、植木環山書論―有田光甫 5、若林文平先生伝 6、高室寿太郎先生伝 7、丹波和田人物伝―松井拳堂 8、野添靖翁小伝 9、池田佐太郎翁小伝・中岡朝一翁略伝（以下略）

丹波の莊園

細見 末雄 著

まず著者の紹介から―細見末雄氏は、水上町横田に生れた。兵庫県立御影師範を卒業後教職に携り、青垣中学校長を最後に退職、以後

郷土史の研究に没頭し、『生郷村史』『兵庫県ふるさと散歩』『東丹波の莊園』『丹波の群雄』などの著作があるように、今回発刊の『丹波の莊園』はこれらの研究の集大成ともいえる名著である。

内容は丹波六郡の中世日本における莊園の歴史を現地を踏査してまとめあげたもので、巻末に収録された参考文献の多いのを見て、著者の研究の深さがうかがえて、頭のさがる思いがする。まことに貴重なるさとの祖先の営みがうかがえる好著である。水上郡内には二十二の莊園があり、それぞれに詳しい解説が述べられ、郷土のその昔がしのばれる。各位一読をすすめたい。（松）（A五判二四〇頁、価三、九〇〇円、名著出版刊）

八潮路詠草（抄）

水上町在住 佐中 精一

ひさびさの言葉たがひに交しつ つ そぞろ歩きは竹の下みち

移ろひてよろづ常なく見ゆる世に 昔ながらの小柴垣あわれ

丹波路も遠くはあらぬ北陸賊の 柿の梢のあふぎみられて

古門をくぐるをりしも老松の こずゑはるかに松蟬のなく

以上数首だけ抜きましたが、全五章いずれも作者の旅の歌で、そ

れぞれに前文と和歌が毛筆書きの和綴というユニークな装丁。珍しい歌集である。

和歌に興味と関心のある方には実費で頒けてくれるとの事。申し込みは氷上町石生、冬青舎宛。なお佐仲精一氏は会員佐中哲郎君の父君で四冊目の作品集だとの事。(松)

(四) 文化財 丹波の錦

これはまた素晴らしく豪華な出版である。一千年の歴史を秘めている丹波全域に亘る重要文化財である秘仏、秘宝二六〇点をオールカラーで再現するという画期的な作品である。



氷上郡関係では氷上町達身寺の秘仏のほか市島、春日、柏原、山南など全域に亘って収録されている。B4判、三〇〇頁、定価二五、〇〇〇円(達身寺の坐像)

西崎祥の踊りを観る会



公演の度ごとに御観覧御希望の方を無料で御招待申し上げます。

はがきで左記にお申し込み下さい。

〒142 品川区小山四ノ九ノ三

西崎祥舞踊研究社
「西崎祥の会」係

これからのエネルギー問題

在取手市 若森 敏郎
(山南)

はしがき

我が国が戦後の混乱から立直り、経済自立体制を確立したのは昭和三〇年ころからと思われる。

それから今日まで我が国は驚異の発展を遂げた。この原動力の一つは何と言っても、豊富低廉に輸入された石油であった。

昭和三〇年代の後半から昭和四八年十月の第一次石油ショックまでの間、我が国はそれこそ石油を湯水の如く消費して工業生産力を上げ、輸出を伸ばし、高度成長を世界に誇示した。勿論、この間あらゆる方面において生産性が追求され、工業製品の質の向上と生産原価の低減に努めて来た。これが、鉄鋼・自動車・造船・家電製品その他あらゆる面にわたって国際競争力を確固不動のものとする基礎となったのである。

この期間に我々の暮らしも大巾な変革を遂げた。昭和二〇年代までは家庭で使うエネルギーは僅かな電灯の他には薪炭だけが主なものであった。しかし、現在では薪炭は都市から姿を消して久しく、ガス・石油がこれに代わった。冬の暖房は石油によるセントラルヒーティング、

夏の冷房は電気によるルームクーラーの生活へと大きく変化した。

昭和四八年十月の第一次石油危機は石油にとつぱりと潰った我が国の経済を根本的に変えるかと思われる程のショックであった。

その後の相次ぐ石油の値上りは昨年十二月遂に一バレル(一五九)が実質四ドルとなり、僅か七年間に二〇倍近い高騰をした。この事態に対処すべく我が国のエネルギー政策も根本的な変革を迫られることになった。

会員の親睦を旨とする本誌「山ざる」にこの様な記事はいささか不似合ではあるが編集子の御了承を得て、日本のエネルギー問題について一番身近な電力の需要と供給の面から眺めながら、これからのエネルギーについて、考えて見たいと思う。

一、我が国電力需給の現状

戦後の復興には豊富・低廉な電力供給が不可欠のものであり、我が国の電力業界はよくこの要求に応えて来た。産業の発展が更に電力の需要を惹き起し、廉い電力が更に生産活動を刺激することになり、相乗作用によって電力需要はますます増大した。

昭和三〇年代は我が国水力発電所建設の黄金時代であり、有名な黒四・奥只見・佐久間などの大容量貯水池式水力発電所が統々と建設された。しかし量的には大容量火力発電には太刀打ち出来ず、旺盛な需要に対処すべく一ユニット六〇万kVA、発電所出力三〇〇万kVAという様な大容量石油火力発電所が急ピッチで建設された。幸運にも石油は一バレルにつき二〜三ドルで無制限に輸入され電気は非常に廉く生産された。



若森敏郎氏

昭和三十一年の発電設備は約一四〇〇万kwであつたものが昭和五十三年には約一億二二〇〇万kwにまで増強されており、年率平均一〇%以上の伸び率となる。このような現象は世界的に見ても特異な状況である。

この発電施設の電力発生量の伸び率を世界主要国との比較で図1に示す。

昭和三〇年七〇〇億kwh(キロワットアワー)であつたものが、万博の年には三六〇〇億kwhと五倍以上に増えている。

ついで第一次石油ショックによる多少の落込みはあつたものの翌年にはすぐに回復、昭和五二年には五四〇〇億kwhと増加した。最近では経済成長の鈍化から多少の伸び悩みはあるものの、昭和五五年度推定は六〇〇〇億kwh以上になることが予想される。

本図には自家発電所による発生電力も含まれる。また発電所自体が所内用に消費する電力量、送配電線の損失電力量も含まれる。従つて正味の供給電力量は右の夫々の電力量を差引いたものとなる。

この結果昭和五十二年の実績値で、産業用約二七〇〇億kwh、民生用約一二〇〇億kwh位が消費されたことになり、各家庭の月平均電力使用量は大体二五〇〜三〇〇kwhと推定される。薪炭が主たるエネルギー源であつた昭和二〇年代の家庭では電力消費量は恐らく四

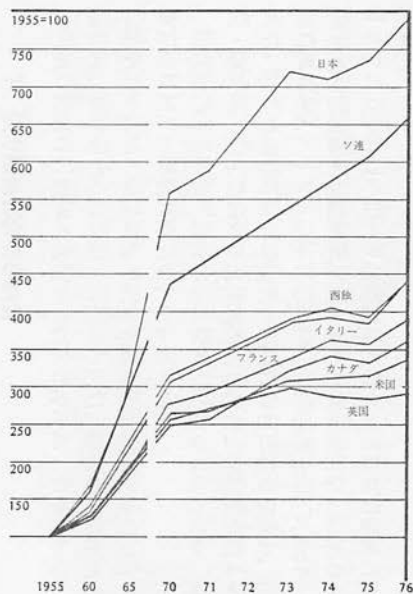


図-1 主要国における電力発生量の伸び率(昭和30年を100とする)〈電力調査会資料〉

〇〜五〇kwh位と推定されるので、家庭の電気使用量も大巾に増えたことがわかる。最近の数値(昭四八〜昭五三)では電灯需要(一般家庭用の所要電力量)の年平均伸び率は約七%、電力(一般産業用需要電力量)の年平均伸び率は三・四%となっている。昭和三〇年より石油ショックまでの数値は前者が一三%、後者が一一・六%である。産業用の伸び率の激減は産業界が省エネルギーに真剣に取り組んだ効果の現れでもあつて、あまり深刻な現象ではない。

ここで多少専門的になるが送電連系について触れておきたい。

すでに周知の様に我が国の電力供給は沖繩電力も合めて一〇社の電力会社で運営されている。沖繩電力を除く九社は基幹送電線によって相互に結ばれ季節的な電力会社間の電力調整や事故時の緊急融通を行

つており、図2にこの状況を示す。

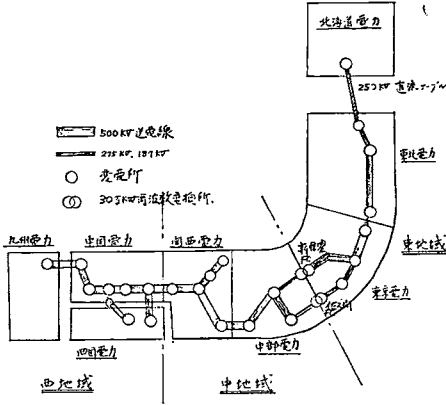
我が国の電力の周波数は中部地区を境にして東は五〇(Hz)、西は六〇(Hz)で、これが従来東西の電力連系を困難にしていた。今や技術の発達には静岡県の佐久間と長野県の新信濃に夫々周波数変換所を完成させ、東西の電力はあたかも同一周波数の様に連系されている。

また長年の懸案であった北海道と本州との電力連系も直流送電技術、交直変換技術の発達により昭和五四年一月に実現した。現在では本州と北海道は六〇万kwを限度として電力が自由に融通出来る。

このため、現在では九州で発生した余剰電力を僅か五%の電力損失で北海道に輸送することさえ可能となった。

日本のあらゆる産業がそうであった様に、エネルギー転換産業である電力業界も過去三〇年間に設備の合理化を行ない、損失を最小にし生産原価を切下げ、豊富低廉な電力の供給に努力して来た。しかしながら、生産される電力の八〇%が輸入エネルギーである石油が転換されたものである以上、石油の高騰による電力料金の値上りは不可避の趨勢となつて来るため、これからは脱石油

図-2 送電連系図 (昭和54年1月現在)



の電力生産が強く要請される。

二、世界のエネルギー事情と石油代替エネルギーの開発

我々に一番身近なエネルギーの一つである電力について我が国の需給状況は前述の通りである。電力生産の源である石油・天然ガスなどのエネルギー資源について検討する。

図3に昭和五三年(一九七八年)における自由世界主要国のエネルギー使用状況を示す。

この図から明らか様な様に、アメリカのエネルギー使用量は日本の消費量の約五倍、自由世界全体のエネルギー需要の約四〇%をアメリカ一國で消費している。しかし、全エネルギーの輸入依存度は日本が八

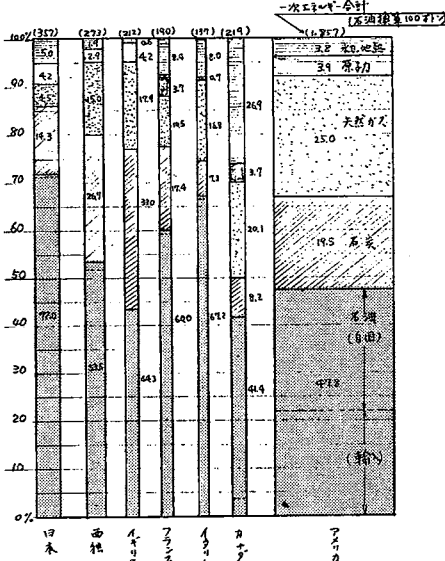


図-3 自由主義主要国の一次エネルギー需要状況比率 (資源エネルギー庁, エネルギー関係資料)

八%に對し、アメリカは僅かに二〇%にすぎない。石油だけについて見ると、日本は殆んど全量を輸入するに對して、アメリカは四四%となる。我が国の人口約一・一億人、アメリカの人口約二・二億人に對し、石油消費は我が国が三億 kl 、アメリカが一〇億 kl であつて、アメリカは国民一人當り日本の一・五倍以上の石油を消費していることになる。

また、我が国は全エネルギー消費量の五六%以上が産業用に消費されるが、アメリカでは産業用に三二%が消費されるにすぎない。

さて、第一次石油ショック後も世界の石油消費は相変わらず旺盛で昭和五三年の実績では二二〇億 kl /年(三五億 kl /年)で、その中約六〇%が自由世界の先進國で消費されている。この状態が続けば世界の石油確認埋藏量は三〇年を待たずに枯渇することになる。

最近のOPECの動き、イラン・イラク戦争の様相を見ると、物理的に石油が枯渇する以前に生産が抑制され、需給のアンバランスが生ずることが懸念される。

IEA(國際エネルギー機関)は自由世界の石油消費抑制目標を定め省エネルギー政策を推進することを呼びかけているが、それでも石油の需給ギャップは避けられないものと見ている。

昭和六〇年になると早くも需給ギャップは一日につき三三〇万バレルとなり、二一世紀に入る昭和七五年には、一日につき二八〇〇万バレルの不足が生ずることになる。この量は紀元二〇〇〇年の初頭には全使用エネルギーの一五%を石油代替エネルギーで賄うことが必要となる。

この石油需給ギャップを少しでも埋めるためには自由世界はあげて

一層の省エネルギーに取り組むことが必要であるが、これと共に石油代替エネルギーの開発を推進することが望まれる。石油以外の化石燃料の利用拡大も一層必要であるが、次の様な問題点があるため、一朝一夕には実行し難い事情である。

①石炭⇌石炭は石油換算三四三〇億トンの埋藏が確認されているが石油に比べて取り扱いが不便であること、灰処理や排煙処理など問題点が多く、今迄あまり利用されていなかった。液化・ガス化技術の確立によつて石油と等価に扱える様になれば利用は一段と進むであらう。

②天然ガス⇌石油ほど産出地域が限定されておらず、また埋藏量も多いのでこれから大量に消費されるであらう。液化技術の発達により運搬貯蔵が容易になった。また無公害エネルギーであることが最大の魅力である。

③タールサンドとオイルシェール⇌現在はまだ採算ベースに乗らずとして打捨てられている。近い将来は石油代替エネルギーのホープとなることが期待される。

人類が究極のエネルギーである核融合反応を手中に納めるまでにはまだ若干の歳月が必要である。それまでのつなぎのエネルギーとして原子力は、軽水炉に対する燃料を前提とするとウラニウムは現在知られている埋藏量では今世紀末で資源の不足が心配される。しかし高速増殖炉の開発がすすめば燃料資源の問題は解決する。放射能汚染の点から原子力発電所を無制限に開発するわけにはいかない。

この様なことからローカルエネルギーとしての太陽熱、地熱、風力、潮力などの利用が盛んとなり、水力の見直しも行なわれることで

あろう。

以上の状況は我が国においても同一であって、全エネルギーの八八%を輸入に頼っている我が国としては省エネルギーに加えて一層ローカルエネルギーの開発に努める必要があろう。

三、日本のエネルギー事情

IEA関係理事会の決定をまっまでもなく、省エネルギーは我が国

	輸入依存度		部門別エネルギー消費割合		
	全エネルギー比	石油比	民生	輸送	産業
日本	88.0%	99.8%	22.9%	21.0%	56.1%
西独	55.0	95.9	39.4	18.3	42.3
イギリス	26.3	58.0	36.1	20.9	42.0
アメリカ	18.9	43.7	34.0	33.8	32.2

表一 エネルギーの輸入依存度と部門別エネルギー消費割合
(昭和52年 資源エネルギー庁 エネルギー関係資料)

自体の問題である。

石油高騰下の世界情勢の中にあつて、我が国が現在程度の経済発展を維持し、先進国としての責任を果たすためには、省エネルギーの推進と共に石油代替エネルギーの使用を更に一層拡大して行く必要がある。

この目的に沿うべく作定された電力の長期目標の発電設備出力は、昭和五四年より一六六年間に年率五・一%の割合で増強されるに對し、石油火力発電所は昭和六〇年の六一四〇万千瓦をピークにして、以後は設備の補充を行わず、逆に年率三・五%の割合にて設備を廃止して行く計画である。

これによって、発電のために消費

される石油の構成比は昭和五四年度四六・九%であったものが昭和七〇年度末には一五・五%まで引下げられる。石油火力発電所の設備縮少を補うものとしてLNG火力(天然ガス火力)、石炭火力、原子力発電所が夫々年率五・八%、一四%、一〇・八%の割合で増強される。一般水力については、今までかなり開発がすすんでいるためあまり多くを期待出来ず一六六年間における伸び率は年率三%にすぎない。原子力発電所や石炭火力の設備増に伴うピーク負荷調整用の揚水発電所の建設は今後共必要となり、年率八・二%の伸びとなる。

従来は電力需要のピークは点灯ピークという呼称からも明らかな様に、一番夜の長い冬の夕方に現われるのが一般的であったが、現在においては、夏期にピークが現われる様になった。これは生活水準の向上に伴う家庭用冷房需要が原因であると言われている。

昭和四八年の第一次石油ショック前の家庭におけるエアコンの普及率は全世界の三〇%であったが、石油ショック後もこの騰勢は続き、昭和五三年度の普及率は約四〇%、現在では約六〇%にもなると推定されているので、夏ピーク対策がこれからの電力需給の大問題になる。この状況から明らかなことはガス冷房が普及すれば電力・ガス事業共に年間を通じて設備が平均して使用出来るので、ピーク需要が平滑化出来るということである。

現状ではビルの大形冷房設備にガス冷房はかなり普及した。家庭用の小型ガス冷房は現在まだ開発中で普及はまだまだ先のことである。家庭用の小型ガス冷房機が電気によるエアコン並の手軽さで利用出来、コストも廉くなればピークシフト上非常に有効であるから、実現が待望される。

電力供給における石油の節減対策は上述の通りであるが、他産業についても省エネルギーと脱石油は着々とすすめられている。

製鉄所においては熱源としての石油の使用は既に過去のものととなり、コークスの使用についても大巾な節減が図られている。また炉頂における排ガスの圧力を有効利用する炉頂発電や工程途中における排熱エネルギーを有効利用する排熱回収発電もすすみ、製鉄所で消費する電力エネルギーをすべて自己工場の排熱・排圧エネルギー回収による自家発電で賄う様になるであろう。

大量にLNG（液化天然ガス）を使用するガス会社ではマイナス六二〇で輸入されるLNGを、再ガス化する際に放出される冷熱エネルギーを利用し食肉冷凍、廃プラスチックや廃タイヤなどの低温粉碎などの事業を行なっている。最近では、冷熱利用の発電技術が確立し、自己の工場で消費する電力をすべて冷熱発電で賄う計画である。

大量にLNGを使用するLNG火力発電所でも冷熱発電で所内発電力を賄い発電所々内率の低減を計画している。

最近建設される都市ゴミの焼却場ではゴミの燃焼熱を有効利用するため発電設備を附属させたり、給湯による地域暖房を計画する処もある。また下水処理場では発生するメタンガスによるガス発電を計画する様になった。

一般の生産工場においても電気代の高騰に対処して省エネルギー対策をすすめている。

また一般家庭においても太陽熱温水器の普及や断熱材の使用による省エネルギーが着々と実行されている。

ここで強調すべきことは、電気エネルギーは止むを得ぬ場合の他は

熱源として利用するということである。それは火力発電所で石油燃料によって発電された電気エネルギーは、需要地にて利用されるまでに燃料のもつエネルギーの七〇%が失われるから、需要地にて例えば一〇%の石油を使うのと同じ熱を電気で発生させようとするれば発電所では三三%の石油を消費する必要があるからである。この意味から電気炊飯器や電気湯わかし器は省エネルギーの観点からはあまり推奨すべき商品ではない。

四、我が国における石油代替エネルギーの開発

石油は有限のものであり、我が国の消費する石油の殆んどが中近東地区から輸入されていることを考えると、我が国のエネルギー供給構造は非常に脆弱なものであり、国家安全上から見ても不安なものである。

このため総合エネルギー調査会は、昭和五二年八月に「総合エネルギー政策の七つの柱と二つの前提」を提言した。ここにその詳細を掲げることは略すが、要は省エネルギーの推進、国産資源の活用、石油代替エネルギーの開発、エネルギー供給源の多角化、エネルギー技術開発の促進などが主たる柱であり、石油の備蓄を増強して経済安全保障を強化することも述べている。これらの施策と開発には莫大な資金と国民的合意を形成することが前提である。

この提言は今後の我が国のエネルギー政策の目標となるものであって、現在この提言に沿って着々と施策がすすめられている。

例えばエネルギー技術開発については昭和四九年七月にサンシャイン計画が発足して、太陽、地熱、石炭、水素の四つのエネルギーを中

心に技術開発をすすめることになった。太陽から地上に達するエネルギーは一平方メートル当り一匹とされている。しかしこのエネルギーを有効に活用することは種々の制約から困難で、現在最も普及している太陽熱温水器でも効率は一〇%以下であろう。我が国においても太陽熱コレクターの効率向上が一番の急務である。

太陽熱発電については現在香川県の塩田跡地に実証プラントを建設中であるが、太陽光を集光し、この熱で一〇〇匹の蒸気タービンを駆動するための蒸気を作るものである。これでも広いスペースを必要とする。大規模実用プラントの建設は不可能に近い。

太陽光発電については能率のよい太陽電池（発電素子）の開発が急務である。現在は無線中継所、灯標の電源として小規模のものが広く実用されている。

地熱は火山国日本では有望であろうと考えられるが、環境保全の問題もあり、大規模な施設の建設は困難な様に思われる。現在稼働中の発電所の合計出力は一五万匹に達している。

今後は一五〇〇メートル以上の深部に熱源を求めることになる。石炭はガス化・液化して使用すれば石油と等価に扱える。産出国で液化して日本に輸入すれば灰処理の困難もないわけである。現在では中間段階の石炭の利用法として、石炭を微粉化し、これと重油とを混合したCOM燃料を石油火力発電所で使用し、重油の節減をはかることが試みられている。

水素については水の電気分解法、沃素化合物などの化学物質を使用した反応法などにより水を酸素と水素に分解することが考えられている。この水素と酸素は燃料電池内で反応して再び水となる。この際発

生する電気は交流に変換して一般電力として利用される。この発電方式は全くの無公害であるから、都市の地下などに分散配置することが出来る利点がある。現在一五万匹位のものを単位として建設するための基礎計画がすすめられている。

以上の外にローカルエネルギーとしての風力、波力、潮力などの利用が考えられる。また水力については以前建設コストの関係で打捨てられていたものが石油の高騰によって再び価値が認められるものもこれから多く出現するであろう。

これらのローカルエネルギーは当然大規模な原子力、LNG、石炭火力発電所に比べれば発生するエネルギーは微々たるものではあっても石油の節減につながり、大規模電源を補完する役割を果たすものである。

むすび

一九八〇年代は「構造的なエネルギー危機の時代」といわれている。イラン革命にはじまった第二次石油ショック、これに続くイラン・イラク戦争による両国の石油産出の中断、などのため、石油の需給は一層産油国の手中におさまり、バリ島のOPEC会議で、石油は一バレルが実質四ドルを越す時代となった。

今までは石油の高騰による国際収支の悪化は自動車、家電、鉄鋼などの輸出で補って来た。しかし、無制限な輸出増大は諸外国の反撥をかうことになる。

この様な中で我が国が実質経済成長率五%台を維持し、社会福祉を向上させるためには省エネルギーと石油代替エネルギーの開発を

より一層推し進めて行く必要がある。

この時期に我が国の現在のエネルギー使用状況、今後の方向づけについて考察しておくことは望ましいことであるとの観点から、電力需要を主として現在のエネルギー事情とこれからの問題について検討した。いささかなりとも各位の御参考となれば幸甚である。

南アジア視察記

西山 敬次郎

(市島)

一、中小企業世界大会へ

前回の選挙に際しましては六九四票という僅少差で次点となり、丹波の皆様のご期待にそい得なくて本当に申し訳なく思っております。

そのような気持の日々を送っておりますところ、七月の終りごろ政府の関係筋から「今度第一回の中小企業世界大会が印度のニューデリーで開かれるが、かつては中小企業庁次長や貿易局長を歴任した君が日本派遣団の団長として最適任と思うが」というお誘いをいただきました。私もこの際、お役に立たせていただける事ならとおひきうけしました。

通産省在任中は東南アジア、欧州、北米、南米、濠州、ニュージー

またこの様な異質の記事に対して多くのページを割いて載いた「山ざる」編集委員会に対して厚く御礼申し上げる。

日本ブランド協会プロジェクトマネージャー

(昭和五六年一月四日)

ランドなどアフリカ大陸以外のすべての大陸に出張した私も、印度は未知の土地でありました。アフガニスタンやイラン、イラクの問題などから印度洋やアラビヤ海は世界の注目の的でもあり、わが国とはすでに六世紀頃から交際があつて天竺の名で中国、韓国と並んで最も古くからつきあいがあり、仏教をはじめ色々な文明の影響をうけていた印度で見聞をひろめる事も大きな魅力でありました。

二、事情好転した印度

いよいよ十一月十一日に成田空港を出発し十時間余りでデリー空港に到着しました。来て見て想像外であつたのは一つには当地は大変汚なくてしかも乾季になつたので浮浪者が北上して混雑しているという話も耳にしていたのですが、空港周辺は人もまばらで、それ程汚ないとも思わなかつた事であります。印度では十年余り干ばつが続き飢饉だつたのですか、一昨年と今年は米が五千万トン余り、穀物全体も一億三千万トンと空前の豊作になりました。そのため日本の九倍の面積に六倍の人口をかかえている印度でも、輸送の不備や貧富の差で完全に食糧が充足しているとはまだはいかないまでも、かなり事情が好転しているからではないかと思われました。

もう一つは米国でも問題になつてゐるやうに日本車の輸出が大変増えているので、東南アジアのどの国に行つても日本車をよく見かけるのに、当地では殆んどなくて印度産のアンバサダーばかりが走つてゐる事でした。この国は何でも国産化するのを目標にしており、宇宙衛星も世界で六番目の打ち上げ国であり、自動車の場合は輸入関税が高いためです。

三、人材養成に国際協力

早速翌十二日から世界大会が始まりました。米英独仏など欧米諸国の他アジア、南米、アフリカなど約四十ヶ国から六百五十人ぐらゐの代表がビギャンパンという国際会議場に集まり、地元からはベンカタラーマン蔵相、ケムルジー商相なども出席しておりました。印度は中小企業対策に非常に熱心、中小企業分野調整法があつて指定された八〇七業種については大企業は事業を行つてはいけないと保護してゐる程です。

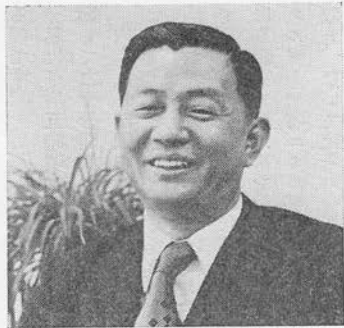
私は午后五時頃「開発途上国におけるわが国の役割と中小企業」と題して二十分間演説を行いました。

内容はわが国の中小企業が日本の経済活動に極めて大きな役割を果たし続けたこと、特に戦後過剰労働力の雇用の場として軽工業分野で活躍し、一九六〇年代には重化学工業化の時代にその部品や加工工程で活躍し、七〇年代には開発途上国の追い上げや円高、石油ショックにも耐えて来た事を強調し、今後は開発途上国に対して第一に代替エネルギーや省エネルギーの開発、第二に中小企業が豊富な労働力を吸収し、ひいてはその労働者が消費財の需要を拡大する事から大いに中

小企業を育成すること、第三に製品輸出の開発拡大とわが国からの投資の推進、技術移転による競争力の強化、第四には各分野で活動を担う技能者、技術者、経営者、管理者、研究者等の豊富な人材の養成、これら四項目に対して協力を惜しまない事を強調し、今後とも各国が情報交換を密にし、各国の中小企業が協力関係を推し進めるため今回のような大会が非常に有益であると結んでおきました。会議はその後熱心に討議が続けられ、十四日に盛会のうちに終了しました。この会議を通じて最大の関心事は開発途上国の中小企業にどうしたら技術を移転する事が出来るかという問題でこれに多くの時間が費されました。

四、日本語通訳だけがない

いつも国際会議に出席すると残念に思うのですが、イヤホーンの手ヤネルを切り換える事によつて英語、仏語、スペイン語が同時に通訳されており、今回は使用しなかつたのですが、ここではロシア語、アラビヤ語の通訳のコナーも常設されているのに日本語には誰も通訳してくれない事で、わが国の国力も未だしの感を強くしました。印度は非同盟中立外交をとつて来ておりますが、中国とは国境を接しており、パキスタンとも紛争がありました。今度のアメリカ大統領選挙について二、三の人々の感想をきいてみると、レーガン氏は対ソ強硬等をとるのではないかという点で、どちらかといえばカーター氏の方がよいという感じを持っており、東南アジア諸国が「強いアメリカ」支持から、レーガン氏歓迎の空気を持っているのとは対照的でありました。また、イラン、イラクから石油の大半を輸入しているので、今



西山敬次郎氏

次の戦争によって石油が減少する事が懸念されておりました。

ある朝ホテルでふと新聞を開くと、それには「インドは独立後三十三年の間に多くのものが変化したが、変らないものが二つある。それは貧乏と教育とである」とありました。確かに南方特有の果物が

多数あって、これらを取って食べられる利点はあっても、一人当りの年間の所得が百五十ドルと日本の五十分の一というのでは本当に貧しい事で、六億六千万の国民に充分な職場と賃金を用意するのは大変な課題だと思われず。会議の後デリー郊外にあるオリンピックスタジアムを視察しましたが、日本でならNCで自動的に削るところを手でやっているのを見れば、如何に技術と雇用とを調和させるのに苦心しているかを見る思いがしました。

その後日曜日の休日を利用して東南方二百キロにあるアグラ市のタージマハールに行きました。デリーからボンベイに通じるハイウェイを自動車と共に自転車、馬車、牛、豚、山羊、象、らくだが行き交っており、正に印度の面目躍如としたものでした。ただ沿線の田畑は比較的耕地整理が進んでおり、地下からはポンプで灌漑用水が吸み上げられ、比較的基盤が整備されておると感じました。

五、活気呈すスリランカ

五千年の歴史をもつ印度を後にしてスリランカ(セイロン)に行きました。この国は三年前に左派連合のパンダラナイケ政権が崩壊して、親西欧派のジャヤワルデネ氏が政権をとっております。医療と教育が無料という政策は続けておりますが、自由貿易地域を設けて外国からの投資を促進しており、わずか三年でかなりの成果をあげ、非常に活気を呈しつつあります。私達は西独企業の既製服工場と香港企業のブラウス工場を視察しました。セイロン茶で有名な茶畑は島の中部のキヤンディ地方にあつて、パンダラナイケ時代に国有化されたそうです。見渡す限りの広大なエステートには、日本と同じようなカゴをかかえた茶摘み風景が見られます。

次いでシンガポールに行きましたが、二年前に訪問した時會つたり、クワン、ユー首相はたまたま中国に行つておられました。首相は非常に日本の協力を期待しており、メルバル島では住友化学の工場が植音も高く建設中でありました。一方ではブキマ高地や日本人墓地の寺内南方軍総司令官、戦病死した軍人軍属の墓に詣でると、四十年近い過去を想い起こさざるを得ませんでした。唯若い世代の人々は殆んどその記憶もなく、ジョホール水道に行つた時など運転手君が、「日本人は何故ここを訪れたがるのか」と疑問を呈する程でした。

六、日本の指導を期待

最後にバンコックに立ち寄りました。ここの工業協会のタボン会長は日産自動車を現地でも組み立てているサイアムモーターズの社長でも

ありますが、彼は「ソ連の南下を防ぐためには日米歐濠と東南アジア諸国の民間が協力しなければならぬ。特にタイ国はあくまで農業が基幹であるから日本には鶏をはじめ、畜産の加工について指導を願ひ、原料よりも加工工業を推し進めたい」と強調しておりました。現地で東洋紡と合弁の紡績織物工場を視察しましたが最新の立派な機械設備をもっております。資本金はタイ側が五十一%と必ず過半数を制しており、日本人技術者が一日も早く技術を移転して引き揚げる事が期待されております。

総じて今回訪問した各国は物価の上昇に悩んでおりましたが、色々な点で日本の協力と指導を期待する気持が高まっているように見受け、わが国の今後の世界に貢献すべき役割と責任の重みをひしひしと感じながら予定の日程を無事終了して帰国しました。

アジアの諸国はかつては製鉄や石油化学の建設を希望して非常に飛躍した現実ばなれの要求が強かったのですが、最近ではあくまで農業を基幹として、その加工や肥料などの農業関連の事業をのばそうとする健全な方向をたどっているように思われます。

日本に帰って丹波の過疎の解消を考える上においても、非常に有益な見聞を広めさせてもらった事を感謝すると共に、丹波の住みよいふるさとづくりに挺身する決意を更に新たにしました。

現代における桜

上田 三四二

(小野市)

昨年の歌会始の御題は桜であった。

桜をどう歌うか。桜のある風景、桜のある生活をいま人々はこのようにとらえているか。選者の一人として三万首におよぶ詠進歌につき合つて、いままさらながら桜によせる日本人の思いの深さに打たれた。

蝦夷富士の麓の風も温もりて桜前線日々近づく

花を待つ北の国びとの思いが大きなスケールで歌われている。桜前線という言葉がおこなわれたのは最近だが、これは戦後に生まれた言葉の中でも特にすぐれたものであろう。花だよりの新版である。列島の全体が花の等時線に覆われる。平和の国の平和の象徴である。

山のべの桜は咲けり日もすがら代田に余る水あふれつつ

昔から今に変わらぬ農村風景が歌われている。ふるさとをもつ都市生活者にとっては郷愁をさそう風景であり、農村の人々にとっては繁忙のはじまりを意味する。機械力の導入で労働の私たちはずいぶんとかわつたが、そこに咲く桜はかわらない。その花を農事のしるべとしてその花に作物の吉凶を占った古い時代から、桜はかわらず咲いている。咲き初むる桜の庭に名を呼びて入学児童の組を分けゆく

小学校の先生の歌。……日経新聞連載・花の精神史抜粋(歌人)

柏陵同窓会東京支部

五十五年度総会

さる六月二十八日、アサヒビル大森工場四階で、午後二時から開催された。工場見学を終り、岡吉明氏（昭三六卒）の司会で総会に入り、有田支部長の挨拶。つづいて村上末吉氏（昭一三卒）より会務報告があり、会則の改訂、役員選任が議された。梶浦副支部長の音頭で乾杯し懇親会に移った。テーブル毎の懐旧談に花が咲き四時三十分ごろ、中学校・女学校・高校の各校歌を斉唱し、上山副支部長の発声でバンザイを三唱して散会した。出席者は五十五名、（男子三〇、女子二五名）、初出席の会員も多かった。

尚、会員名簿を作製、年末に、五十五年度以降の会費納入会員宛発送した。名簿をお受け取りにならなかった方は年会員一〇〇〇円を添えて左記に請求下さい。

〒国世田谷区南烏山二一三三一—一

村上末吉方、柏陵同窓会東京支部

振替 東京七一一九五〇一六

日本画 常岡幹彦 展

常岡幹彦個展

常岡幹彦画伯の五十五年度日本画個展は、九月二十九日から十月四日まで、東京京橋の中央公論画廊で開催された。今回は、霧の参道6Fの外は、殆んどサムホールの小品ばかり三十余点を展示している。郷友多数も連日展観に加わり、売上げも好調であった。

囲碁同好会の成績

氷上囲碁同好会の忘年大会は五五年十二月二十日、東京代々木の倶楽部で開催、梶浦、渡辺氏らの長老始め十名で、大会としては淋しい集まりであったが、みな熱のこもった闘いを挑んだ。終了後、全所で忘年会を開き、

囲碁同好会成績表〈数字は左勝・右負〉

月 日	4/12	7/27	12/20
三川足藤	5勝	—	4-1
小下坂新谷	2敗	—	—
余前松梶	1-3	5-3	5-5
新	8-1	1-8	—
余	4-8	—	2-6
前	3-5	—	—
松	4-1	—	2-4
梶	1-5	4-4	—
新	3-4	3-1	—
谷	1-2	5-1	3-3
余	6-0	4-3	3-0
前	0-3	5-1	—
松	—	4-6	4-4
梶	—	1-4	2-3
新	—	—	2-1

杯を傾けて懇親を深めた。同好会では、さる四月十二日と全九月二十七日にも例会を開いたが、五五年度での開催は例年より少なかった。

なお、会では同好者の参加を期待しているので、希望者は足立正または松山幸逸までご連絡を待っている。

成績表は次の通り。

ゴルフ同好会報告

久しく開催の機会に恵まれなかったゴルフ同好会のコンペが、昨年再開され、第一回七月十五日、小金井C、C(十六名参加)、第二回、十月二十八日、戸塚C、C(十二名参加)において楽しく技を競いました。

足立会長から優勝カップが、又西川顧問からB、B杯が、同好会に寄贈されて、参加者のはげみになっています。

会の運営は、別項の規約によりますが、年会費を三〇〇〇円(通信費・雑費)参加会費、一回につき五、〇〇〇円(賞品、パーティ代)に決めました。

第二回までの成績は左の通りです。(入賞のみ)

	第一回	第二回
一位	加藤信太郎	足立正
二位	岡林逸男	橋爪忠
三位	松下文雄	新町親則
B B	足立正	井上和三

氷上ゴルフ同好会規約

名称 本会は氷上ゴルフ同好会と称する。
目的 会員相互間の親睦と啓蒙をはかること。

入会 関東氷上郷友会の会員にして入会の申し込みをした者およびその知友。

(現在三十名)

幹事 本会の円滑な運営のために常任幹事を四名置く。内一名は会計担当とする。

幹事は会員中より選出し、任期は毎年三月より一年間とする。

行事 ゴルフ会は原則として毎年、三・六・九・十一月を開催月とし、必要に応じて変更する場合もある。

行事運営者 ゴルフ会の場所、日時、会計等一切の世話役は前回の優勝者とブリーパーがすること。

費用 会費は幹事会でこれを定め、会員の賛同を得て決定する。

各ファイ等は各自の支払とする。
ハンデイ・キャップ 入会時は自己申告を適

用するが三十六までとする。更新は優勝二十%、二位十五%、三位十%、何れも四捨五入とし、アンダーパー分だけ更に減する。

カップ 賞品の調達は世話役に一任する。大カップの取り切り戦は特定制により行う。

競技方法 一ハホール・ストロークプレーとする。

順位の決定 同点順位は年齢によって決定する。初参加の入賞は認めない。

二回以上連続不参加後の参加者は優勝のみ一ランク下げ二位とする。

『山ざる』の会

「山ざる」第十一号を批判する会が五五年八月八日夕刻五時半から東京銀座のメルサ会館の『大志満』で開かれた。

例の通り、足立会長の挨拶、伴仲副会長の司会で進められ、和気あいあいのうちに同八時半散会した。席上次号では会員名簿の掲載

を見合せたら?、との意見を求めたが、大した異論がなかったのは収穫であった。

出席者次の通り

足立三治 伴仲信次 上田鉄太郎 出町京子
田中篤郎 須原 清 小田富士夫 西川政一
足立誠一 谷垣正雄 吉住重造 植村章子
常岡幹彦 秋元多美子 小杉武生 芦田律子
足立 徹 足立謙吾 坂上勝郎 渡辺隆男
足立 正 松山幸逸 以上

ひかみ会について

認定生命保険士 足立 正

『生命保険に身体の悪い人を入れないのは不都合だ、保険会社の金もうけ主義じゃないのか、生命保険が一番必要な人達なのに。』
こんなことをいう人が今でもいます。ゴルフのコンペで、スタートのとき、一組の四人が初めのスタート順を決めるためくじを引きます。下の方に筋の入った棒が四本用意されていてそれを引くのですが、下部の筋の入っているところは引く人に見えないようになっています。こんなことは当り前のことで、見

えていれなくじにならないのですから誰もその状況をうたがいません。公平を期するためくじを引き、くじを公平にするために工夫をします。

今仮りに、千人の人が一万円の買物をするとしてします。全員が一万円の靴を買いました。また全員が一万円で生命保険に加入しました。靴を買った場合は、全員が靴の効用を受けることが出来ますが、生命保険に加入した場合、集った金額が一千万円です。千人のうち二人が死亡して、遺族がそれぞれ五百万円宛受けとる、こんな結果が予想されます。この場合、千人のうち誰が五百万円を受けとる二人になるか、初めからわかっているは困るのです。くじと同様加入時の状態に公平性が要求されるゆえんです。スタートラインを同一にし公平性を期するため、加入時の健康状態が問題となるのです。

人間には三つの本能があります。それは、自己維持本能、種族保存本能、集団本能の三つといわれています。生命保険の必要性は、人間のもつこの三つの本能から来た要求の所産です。人間が、自分や種族を守るために、集団で助け合うということは、人類始めて以

来の人間の本能的な働きです。生命保険の仕事は、この本能的な働きに種々工夫をこらして合理化され近代化されて出来たもので、まさに人類の英智の産物としての生命保険文化であるといえます。

日本における生命保険の普及は、生命保険会社の営業サイド一辺倒の傾向が歴史的に強く、そのために生命保険の仕組みや内容等についての理解に欠ける面があつて今後の課題です。したがって普及の状況に歪みのあることはいなめません。一番の問題点は、生命保険に損得を強調しすぎることです。それが、より安く(保険料)より大きく(保険金)といったふうにエスカレートする生命保険商品の開発傾向となり、またそれへの買い替え勧奨セールスとなっています。

生命保険の本質はミューチュアル・エイド(相互の助け合い)にあります。エイドの数の集りと長期に亘る契約の継続性が必然的にミューチュアル・エイドから内容をミューチュアルファンド(相互の財産作り)に転化していく働きを見逃すことはできません。この特性をよく見極めて一家のエステートプランに合理的に組み込んで利用することが大切で

す。

昭和四十二年ごろから、郷友会の実質的な事務局として、郷友の方々との交わりのなかで、ご協力を願ってご契約が出来たり、ご紹介によってご契約頂いたりして十年余りの間に件数がふえ、それらをまとめて集金代理店の設置申請を会社に出していましたところ、昭和五十三年十月一日付で、ひかみ会代理所の設立発足のはこびとなりました。偶然とはいえ、丁度郷友会の会計年度の始まりと一致して、集金手数料収入は第一年度二十四万円、第二年度、三十万円となっております。

(会計報告をご参照下さい) これらはすべて郷友会の運営や、「山ざる」制作の資金として活用されております。

ひかみ会は今後も會員の皆様のご協力と支援の下に発展させ、本会の資金源としての地位を高めたいと念じております。従来のご協力を感謝するとともに今後のご支援を切に願ってご報告とします。

☆

本会を脱会希望の方々へ

関東水上郷友会を退会したいというお便りがときどき届きますが、このことについて本会としては左記のような見解、措置をとっておりまして、御了承を願い、出来る限り、氷上郡出身者及び縁故者は引続き會員として本会と共に活躍を祈っております。

記

平素、当会の運営発展に深いご関心を賜り且つ一方ならぬご協力を頂いておりますこと、心から感謝いたします。これまで、會員名簿からの削除は、一、死亡、二、転居不明その他で通信連絡がとれなくなった、三、遠隔地への転居で且つ退会の意志がある、等の場合です。氷上郡出身者及び縁故者で消息のなかった方は随時名簿に収録して今日に至っております。

故郷を遠く離れて苦斗の人生の中で、ふと故郷をなつかしみ、同郷の者が相寄って互いに語り合う機会があったならば、との思いが

この会を成立させたものなのでしょう。現在の環境は一人一人違います。しかし故郷を一つにするという唯一の共通点のための会なのだと思えます。この唯一つの共通点こそ、會員資格なりと考えます。この會員資格のある限り当会會員として會員名簿に登録させて頂き度いと念願するものです。ご諒解を願いたいと思えます。

転居・転任

上山 顕氏 〒106東京都港区元麻布二ノ一
ノ三六サンビューハイツ第一元麻布五〇二
号 電四五一一四九五〇

足立 東一郎氏 〒270-14千葉県印旛郡白井
町堀込一ノ三ノ九ノ五〇一

芦田 行雄氏 〒277柏市高田一二三六ノ一六
電〇四七一一四三一八二三三

石井 和世さん 〒390-02松本市大字里山辺

三二八七ノ三 電〇二六三三三六〇六四〇

荻野 武氏 〒140品川区南大井二ノ二一五
大森海岸ハウス二〇五

木内 実喜夫氏 〒251川崎市多摩区高石七二
ノ一パークハイツ百合ヶ丘五〇八

近藤 哲夫氏 〒350入間郡毛呂山町長瀬
一七八六ノ一 電〇四二九一五一三七九三

佐中 哲郎氏 〒306古河市緑町二二ノ二三
電〇二八〇一三一三七三四

酒井 重男氏 〒301和光市諏訪原団地一ノ八
一〇一 電〇四八四一六二一九六二三

酒井 昇氏 〒950新潟市近江三五一一中村ハ
イツ五〇一

山本 一志氏 〒251藤沢市辻堂西海岸一〇六
一〇一〇八

荻野 正義氏 〒601、37水上郡水上町香良三

〇一〇一(大学を卒業し帰省)

塚口 智也氏 〒604伊丹市行基町一〇二九
電〇七二七〇七七一九七七七六(転勤)

三村 トミノさん 〒673兵庫県加東郡社
町永富七七〇 電社一二十四七七七

柳田 定氏 同紀子さん 〒655宝塚市南ひば
りが丘三一八一二 電〇七九七七八八八
〇四三

▲住居表示変更▼

蘆田 二郎氏 〒180東大和市南街二一六三一
一〇

関 正治氏 〒201狛江市西和泉二一五一三
〇五

新規会員

足立 三男氏(昭二一 青垣町) 〒273船橋市
海神五一三一七 電〇四七四一三三一八

二一〇

葦田 有功氏(大二 水上町) 〒123東京都足
立区江北三一一九一四 電八九〇一三二八
一

井上 庸子さん(昭二三 水上町成松) 〒270
松戸市新松戸三一二九六サンライトパスト
ラルーD一六〇三 電〇四七三二四一
八九二九

梅沢 一仁氏(昭二一 水上町) 〒272市
川市行徳駅前一〇一七太陽神戸銀行社
宅二〇三 電〇四七三二五五二七二二

大岡 弘氏(明四四 山南町) 〒160東京都新
宿区戸塚町四一九一三 電三六二一〇
六八一

梶原 清氏(大一〇 篠山町) 〒152東京都目
黒区東ヶ丘二一三二八アルカサーノ東
ヶ丘三〇二 電四一八一二二五 参議院
議員 会館七三八号 電五〇八一八七三三八

梶原 清氏(大一〇 篠山町) 〒152東京都目
黒区東ヶ丘二一三二八アルカサーノ東
ヶ丘三〇二 電四一八一二二五 参議院
議員 会館七三八号 電五〇八一八七三三八

梶原 やす子さん(山南町) 同 上

影山 三郎氏(市島町) 〒124東京都葛飾区東

新小岩六―五―八 電六九二―〇二八七

小西 保氏 〒608京都市北区小山下総町五一

京都産業大学教授

後藤 豊次氏 〒288鎌倉市津一〇五〇―一五九

電〇四六七―三二二―〇八五

笹原 邦宏氏(昭一六 山南町) 〒280千葉市

千城台西一―二二―二 電〇四七二―一三七

一七〇一七

進藤 博幸氏(昭二五 柏原町) 〒158東京都

目黒区目黒一―七―六グリーンビル 電四

九〇―四九九九

田中 寛氏 〒101 東京都千代田区神田東松

下町一〇 電二五六―九三三七 大菱印刷

有限会社

徳田 良一氏(昭二五 柏原町) 〒120東京都

足立区中央本町一―一八―一四 太陽神戸
銀行梅島寮

堂本 晃氏(昭二二 氷上町) 〒154 東京都

世田谷区梅ヶ丘三―六―七警察宿舍二七号

電四二七―四九九一

畑 正義氏 〒609 41兵庫県水上郡春日町多

利

三原 靖男氏(昭二二 春日町) 〒272 01千

葉県東葛飾郡浦安町富岡三―三サンコーポ

B一〇一四 電〇四七三―五二―九三四四

村上 修美さん(昭一八 山南町) 〒143東京

都大田区南馬込三―三六―一〇―三〇三

電七七五―九一七六

村上 良男氏(大二四 山南町) 〒181三鷹市

大沢二―一〇―二 電〇四二二―三三―一六

〇二九

山本 泉さん(昭二五 柏原町) 〒177東京都

練馬区高野台三―三六―一〇

山本 湧一氏(昭九 柏原町) 〒356川越市寺
尾六五二―一六 電〇四九二―四三―二八四
三

余田 完氏(昭一八 市島町) 〒215川崎市多

摩区千代ヶ丘四―六―九 電〇四四―九五

五―〇四二四

川端 教子さん c/o Pacific Consultants

International JI Patrol Sarayan 38 Jakarta

Indonesia

▲継承会員▼

木下 房子さん 〒215川崎市多摩区王禅寺二

四四四―九一 電〇四四―九五四―六二一

二(五郎氏遺族)

高野 孝一氏 〒321 14日光市和泉二三〇

電〇二八八―四―一五三一五(孝子さん遺

族)

広瀬 すがのさん(山南町) 〒182調布市若葉

町一―三八―一四 電三〇〇―一五九三七

(幸太郎氏遺族)

訃報

荻野定一郎氏逝去

本会顧問、在野法曹会の長老、元第一弁護士会長の荻野定一郎さんが、昭和五五年九月二十七日心不全のため、鎌倉市御成町の自宅で死去された。享年八十六であった。

荻野さんは春日町多田の生れで、小学校卒業直ちに上京、立教中学、一高、京都大学に学び、大正十一年弁護士に登録、岸弁護士事務所を経て独立、以来大昭和製紙ほか各種の要職に就かれて、在野法曹会の長老として終始され、温厚な人格者であった。わが郷友会にもいつも出席されて悦顔を見せておられた。惜しい大先輩を喪ったわけで、告別式は今月二十九日、鎌倉市の妙本寺で営まれ、郷友会から足立会長はじめ伴仲、渡辺、松山氏ら多数参列し、謹んでご冥福をお祈りした。なお法名は次の通り。

信法院高雅日定居士

謹んでご冥福を祈り上げます。

野村千里さん五十五年三月三十日ご逝去。

木下五郎氏 全六月十六日ご逝去。

広瀬幸太郎氏 全七月六日ご逝去。

高野孝子さん 全十一月七日ご逝去。

大橋威彦氏 全十二月ご逝去

山内大学氏 五六年一月九日ご逝去

光山秀子さん 全一月十一日ご逝去

お便り・短信

(着順及び配列順不同)

出来ましたが、同郷の友との新たな出会い
は、まだ実りません。左記の友人ひとりいま
す。

彼は柏原高校時代のクラブの先輩でワコー
ルの宣伝課に勤務しています。

〒184小金井市前原町三ノ三ノ一四

ワコール小金井寮 桂 一郎

坂本 重雄氏(柏原)編集委員のご苦勞で
とても内容の充実した、読みやすく、そして
読みごたえのある「山ざる」に心から感謝し
ております。

「新会員紹介」、「お便り短信」の欄がとて
も参考になります。

費用の点では、名簿は隔年でもよく、異動
の方のみ訂正されればと思います。ちょっと
感謝までに――。

河本 幸子さん(柏原)「山ざる」を読み
丹波の事がひとしおなつかしく思い出されま
した。お名前を存じている方も多く、身近か
に感じました。

柏原にいる両親にも送ってやろうかと考え
ています。なかなかいい本で、さすが丹波人

坂本 正幸氏(春日・多利)若い人たちの
集りの会が欲しいです。東京へ来て七年が過
ぎました。北は北海道、南は九州まで友達が

の集まりだと感心しております。

藤田 十治氏（市島）編集者の皆さん寄稿者の方々のご苦勞、感謝いたします。

菊池 洋子さん（水上）このたび、助教授（武蔵野音楽学校）になりました。演奏会の方も、何とか続けております。「山ざる」いつも楽しみにしております。

常岡 亮氏（柏原・上小倉）旧制柏原中学昭二（26回）卒業の久安、波多、藤原、本部の諸兄、みな元気で活躍のことと存じます。一度健顔に接したいですね。なお、会誌の背部に、号数を印刷されるようご検討願います。整理上也便利です。

高取 由美子さん（青垣）主人の転勤で川崎に参りまして十二年。二、三の親しい丹波出身とのお付合いはありましたが「山ざる」でなつかしい人の名前を見つけて、こんなに沢山の人たちが、関東地区におられるのだと思ひ、力強く感じました。本当にありがたうございました。

小谷 寛治氏（柏原・古市場）六十八歳になりました。よろしく。三年分の会費をお送りします。（自動車電装品商組）

足立 順治氏（水上・幸世）藤沢に移り住んで十九年になります。目下ポランティア。町内の世話ごとや老人の世話など、足はオートバイを利用しています。鎌倉や近隣の寺社や名所をこの足で廻っています。

本年七十八歳、孫二十五人で祝って貰いました。

永井 貞子さん（水上・北由良）「山ざる」を送って頂き、なつかしい方のお名前とお顔を思い出しております。未納の会費まとめて五千円お送りします。

宮崎 文子さん（山南・谷川）「山ざる」なつかしく拜見しました。思いがけない方からお電話を頂いたりして感激いたしました。二年分の会とお送りします。

岡原 裕泰氏（柏原）上京して二十一年、柏原に生れ、育ち、学んだ十九年よりも多く

生活していることになりました。

サラリーマンとしての悲哀をかこつこのごろ、丹波人の慎重さ、ねばりを捨てることなくと張りたいと思っております。

「山ざる」楽しく読んでおります。年一回、これだけの内容をまとめられている編集委員のご努力の並々ならぬことを感ぜずにおられません。

東田 実氏（山南）毎年「山ざる」を拜見する度に、故郷の消息が伺えて本当に楽しい思ひ出にふけています。

荻野雄一郎・節子さん「山ざる」の編集委員の中に亡父辰雄を通じて、お名前を存じていた小田富士夫さんの存在を知り、たのしく思いました。

中村美年子さん（柏原）西崎祥氏の記事によせて「写真を見て思わず『ニャアちゃん』と叫びました。ご近所で妹のお友達だった粕谷京子さんのニックネームです。家庭の複雑な私どもと異なり、やさしそうなお父様と明るなお母さまに育てられ、何不自由なく西川

流の踊りをなさっている、と思っておりますが、いろいろとご苦労があったのですね、ますます『祥の会』の発展を祈っております。

莊 克衛氏(柏原) 内容の充実した「山ざら」を興味深く、幾度も拝見しました。役員各位のご努力に感謝しております。

菱田 ふみ子さん(水上・谷村) この八十年を顧みますと平凡に過して参りました。夫は昭和廿九年に他界いたしました。二男四女は皆それぞれに落つき孫は十三人にぎやかな事でございます。ところが五十二年三月長男の嫁が交通事故で死亡いたしました、ただ偶然とするばかりでございましたが、爾來家の雑用をして居ります。当時孫の長女は女子大に、長男は高校に進学したばかりでしたが、手のかかる子供は居りませんので有難いことと感謝致して居ります。年をとるほど昔の事がなつかしく丹波の山野をおもい出して居ります。

荻野 完二氏(山南・谷川) 小生去年の八月末、左記のところへ転居しました。当地は、

長野市街からちよつと離れたところで、なかなか景色がよいところです。それに静かなことが何よりです。

北側にせまったあまり高くない山は、夏は緑、秋は紅葉と、なかなか美しくしい変化を持っています。小生は、遙か故里丹波の山々を思い出しながら、それらをあかずながめています。殊に近所の公園にある桜の紅葉は、それはすばらしいものでした。

いまは例年になく大雪が降って、全山の木々が真白にそまり、とても美しい眺めです。あたたかくなったら、一度長野へお出ください。

暮の方は相手もいなくさっぱりです。転居先次の通り。

〒380 長野市浅川二ノ一〇〇ノ一二五
電(〇二六二)一四一五一九九

足立 石蔵氏(春日・多田) 雑用にとりまぎれ総会などに欠席失礼いたしております。會長さんはじめ役員の皆様いろいろお世話様になり感謝申し上げます。

足立 和巳氏(青垣) 今夏、中国・北京・

上海と日中友好の旅をして参りました。政治の形態こそ違え、同じアジア人であり歴史を溯れば古代日本文化は中国よりその多くが流入しており、多大の影響を受けていることは衆知の通りです。中国の人達は日本人に対して極めて好意的であるばかりでなく、日本から多くを学びたいと意欲的です。そして丹波の処々に残っていると同じ人間の誠意・誠実さと勤勉が至る所に見られます。機会を得て訪ねられることをすすめます。

足立 由宏氏(青垣) 藤本和幸君の住所がわかりました。

所沢市所沢町並木五二五防衛医科大学学生舎内(防衛医大三年生) 昭和三十三年八月七日生、昭和五十二年柏原高校卒。

係より有難うございました。柏原高校出の方は、昭和四十七年以降卒業の方々は殆んど会員名簿に未収録です。今後とも連絡ご協力下さい。

青木 慧氏(市島) 日曜祝日の休みもとれず来春まで原稿締切りを追われつばなし。残念ながら総会にも出られません。当分追われる

状態から脱出できそうもありません。山猿生活が優雅に思える昨今。

『係より』青木氏は昨年三月、朝汐文社より『日産共栄園の危機―労使二重権力支配の構造―』を出版、その他にも『トヨタその実像』『福沢幸雄事件―トヨタを告発する』等の著書がある。

赤松 勝氏（市島）いつも出席して皆様の御姿等拝見したく思っていますが、どういう訳かいつもその日には都合が悪く本当に残念です。自作の一句、

袴を小手にかざして風車

赤松 誠司氏（姫路）学生時代、尚志館に入館していた縁故でしょうか、毎回「山ざる」を送本頂いており面白く読ませて頂いております。しかし小生は姫路の出身でありこの水上郷友会に入会の資格があるか否かと懸念しておりますがいかがでしょうか。

『係より』赤松氏は『山ざる』三号（昭和四十七年）の名簿に収録されて以来の会員です。会則第三条では、会員を水上郡出身者及び縁故者と定めております。あなたは縁あつ

て会員となられたのですから、引続き末長く当会々員としてとどまっていたいただきたいと思えます。

有田 喜一氏（水上・谷村）病院には月一回位行つて診ていただいております。心電図・尿・血液の検査もしてもらっておりますが可もなし不可もなしのことです。一旦ひびの入った身体で不可でなければ好い方だと思つております。

井本 義一氏（柏原）五五年四月より太陽神戸銀行高円寺支店（国電高円寺駅南口前）に転任。八月、恒例の東京名物『高円寺阿波踊り大会』（廿七、八両日）で大汗をかきました。

『係より』次回、に阿波おどりのスナップ写真を期待しています。

生駒 篤郎氏（柏原）皮膚湿疹と高血圧のため熱海療養中。

植木 伍鹿氏（山南・和田）米寿も目前に迫りましたのでいよいよ息子に相続させんと

四十数年住み慣れた家をつぶして、同敷地内の息子の家に添わせ老夫婦の陰居家を増建築中、ほぼ完成近づき目下移転準備中。新しい家で気分も新しく快適の老生活をして増々長命して下されといわれ、古い使わぬ品は一切持ち込まぬ様にとて、道具、衣類迄どんどん捨てさせられ、嬉しいやら悲しいやら。しかし一人前に成人してくれた子供のせつかくの孝行を無にせず、有難く報ゆる為、流水でお尻を洗わされた気持で、一層長寿を心懸け、ますます元氣を出します。

植村章子さん（春日）大へん充実した「山ざる」を拝読して勉強になりました。殊に荘正衛氏の神代文学、渡辺隆男氏の奮斗記、有田先生のエネルギー問題、伴仲氏の建築と歴史等大変老人にも判り易く読ませて頂きました。西崎女史の舞踊に御精進ぶりは芸に心身共に没入しておられる熱意に教えられる処がございます。先の見えた年令ながら生命のあらゆる限り勉強して行き度いと思っております。二月八日名流舞踊家公演を郷友会有志の方々と参観させて頂きました。西崎祥様は愛弟子の松野好美様と「連獅子」を踊られました

あのお優しいお身体にああもエネルギー的な迫力を蓄えていらっしやるのを拝見して驚きました。連獅子は御承知の通り劇しい所作

で二人の呼吸がびったりと合わなければなりません。実に迫力か溺みなっていて誠に立派に踊り抜かれました。それにしてもまだ高校生のお弟子さんをあそこまで仕込まれた西崎様様に絶大な讃詞を送ります。素人の私がこんな事申し上げるのは失礼ですが、西崎様の連獅子の一分のスキもない踊りにすっかり魅せられました。踊られる方は汗がにじみ出ます。拝見していて、私まで境地に入り込んで汗が出ました。またの機会がありましたら、郷友会の方々も是非御覧になる様お勧めいたします。

「連獅子の呼吸イキふ所作に春の汗」

鶴沢 洋子さん(青垣) 出席出来ず残念でございます。赤羽方面へお越しの折はぜひ御立寄り下さいませ。(旧姓芦田)

遠藤 妙子さん(青垣・佐治) 以前に一度出席させて頂いたことがございますが、若い方の参加が殆んどなく、つまらなく感じてい

ました。若い方も出席出来る様なそういう会のありかたも研究していただけたら幸に存じます。

係より「同感です。若い方々の参加が多くなれば会の気分も変わって来ます。さそい合わせて参加して会の気分を変えて下さるよう期待しています。」

井上 庸子さん(氷上・成松) こちらに来て五年になりますが、「山ざる」を拝見してたくさんの氷上郡出身者の方々がいらっしやるので心強くなりました。

大西 俊治氏(春日・松森) 末端の消費景気冷え込む中であって高額車の販売に当たっていますが、厳しさが身にしみて来ました。

荻野 吟逸氏(市島・上鴨坂) 故郷の市島町には老母が一人で留守してくれていますので一・二ヶ月に一度位帰省していますが、こちらの事はあまりわかりませんし、故郷の事も広くはわかりません。

可部 美智子さん(柏原) 十月八日から十

二日迄、銀座アートエールにて、可部美智子作陶展を催しました。お陰様で盛会でした。十一月十一日から京都美術館にて、女流作陶展が開かれますので最後の追い込みです。(陶芸作家)

門山 寿子さん(氷上) 丹波の山奥からお嫁入りのため上京して八年半。今や一男二女の母親、てんてこまいの毎日をおくっています。早く手がはなれて、すきなことをやってみたいというのが、ささやかな夢です。

河本幸子さん(柏原) 「山ざる」送つていたびとでも嬉しく存じました。柏原に両親が健在ですので送つてやりましたところ、よく知っている方が多く大変なつかしく拝見したとのこと。よかったですと申しております。次号楽しみにしています。

森下千寿子さん(市島・喜多) 今回は姑の一年忌法事と重なり、残念ながら出席できません。今後は出席させて頂いてきますので、よろしく願います。

高速道は五八年

開通の予定

春日町の近況！ 山陰本線、福知山線が複線電化されることとなり、昭和五十四年十一月二十七日、福知山駅構内で起工式挙行。近く着工の予定である。昭和五十八年開通、工費二千億円。

高速自動車国道近畿舞鶴線は昭和五十二年六月、ルート発表。現在、未着手ではあるが、墓地移転等については既に具體的の話し合いに入り、本年内には着工されるはず。

小問題ながら、春日町多利、奥の谷川を昭和四十八年四月から、一級河川に昇格させた。五十五年度から国費で改良。跨いで飛んで渡れるほどの小巾な日本一小さい一級河川である。

畑 正義記（元春日町長）

木戸 源治郎氏（山南町長）五二年発刊した「郷土史写真和田村史」に続いて今回（五年十二月）「続写真和田村史附植木環山先生伝」を発刊しました。

菊池 洋子さん（水上）チャンスがないままこ十年も訪れたことのない、ふるさとに最近はともなつかしさを感ずります。是非一度帰って見たいと思っております。

小寺 確郎氏（青垣・東芦田）栗がすんで、松たけが終って、渋柿の真赤な実が葉も赤くなった半分裸の木に残っている丹波の此頃だと思えます。いつまでたっても懐しい丹波です。

小林 武治氏（春日・新才）国学院大学は昭和五十七年十一月が創立百周年に当たりますので、事業並びに募金一切の責任者としてごたごた中です。北海道滝川市に女子短大設置の委員長としての任事もあり、従来通り外部関係一切を担当しておりますと、本当にすまないことばかりです。

小林 剛氏（市島・北奥）日曜と土曜は乗馬にいそしんでいます。最近は女性乗馬人口が増えて仲々楽しいです。金曜は日本棋院の囲碁教室に出席、初段を目標に励んでいます。六十の手習いで仲々思うようには進歩しません。

近藤 田治氏（春日・東中）松山さんの長寿祝いもあつて総会には是非出席したいのですが、折悪しく十一月九日から十六日まで韓国、台湾の同期生を日本に招待しており、そちらに係わっております。出席出来ません。

栗田 節子さん（柏原）結婚と同時に私達だけこちらの地に来ましたのでずいぶんさびしい思いをしました。が、「山ざる」を送っていただき、ずいぶん多くの水上の方が活躍していらつしやるのを知り、心強くなりました。今は小五、小三、二歳の三人の子育てに追われています。

小西 保氏（柏原）「山ざる」のことは、かねてから姉本田孝子から承わっております。

たが、今回、小、中学校を通じての旧友荘正衛兄から入会の勧誘を受け、京都在住でも構わないとのことですので入会させて頂きたいと存じます。首都圏において、郷党出身の皆様が、政、経、文化の各方面に多彩で輝やかな活躍をなされ、国家社会に多大の寄与をなされつつあることが、「山ざる」を通じてうかがわれ洵に慶賀にたえない次第と存じます。このような「山ざる」の意味の深さを感じ、そのご発展を祈り、私もその恩沢に浴したいと考え、親友荘正衛兄の勧めのもと入会させて頂くことになりました。

住所 千歳京都市北区小山下総町五一

(京都産業大学名誉教授)

荘 正衛氏(柏原・屋敷) 去る五月初め妻が急逝致しまして身辺取り込んでおりますので失礼致します。尚友人小西保君が貴会に人会を希望していただけますのでよろしく。全氏の寄稿を期待しています。全国に散在する未加入の氷上郷友の動静をも把握出来る氷上人消息欄とでも称する情報の伝達を計るに格好なるメディアであると思いますので開放利用出来ませればよいのではないかと存じます。

笹倉 強氏(西脇市) 十二月二十二日午後六時三十分より、日本都市センターホールに於て、ヘンデル作曲「メサイヤ」の演奏会を致しました。ソリストに郷友、菊池洋子さんを迎え、オーケストラは東京ゾリスデン、合唱、城北オラトリオ合唱団、指揮は笹倉強でした。

杉岡 明美さん(氷上・南油良) 今夏、二年ぶりに帰郷し、旧交をあたためてきました。帰郷のたびに故里は発展をとげ、喜ばしい限りですが、反面、思い出にある故里がほとんど変貌して行くのは、離れ住む者のわがままとわかっていても淋しい気もいたしました。

瀬々 妙子さん(柏原) 子供達を保育園に預けていた時は育児を趣味とっていた位、子供は新鮮で感性をゆさぶりました。そうそう仕事一本にしばらく思おうと家事に専念したい女の本性も出てきました。土、日を利用して、ペン作りと園芸教室に行きかけたところ。

関 正治氏(山南) ふるさとの香り高い「山ざる」毎号御恵送いただき厚く御礼申し上げます。いつもなつかしく拝読させていただいておりますが、中でも特にこのたびの十一号は内容も充実、大変興味と関心をもって拝読させていただきました。なお新聞記事の切抜きでも結構です。「山ざる」の片隅にふるさとニュースでもお載せいただくとは有難いと思えます。

田沢 よしゑさん(氷上・和田) いよいよ外出も大儀になりまして、庭の草花の手入れや、折にふれ同好の友と謡などで日を過しております。

田中 さち子さん(山南) 高校からの刺しゅうを、教室で作って教えております。千葉方面までも出掛けております。こちらに来て十三年、地元よりも地理がくわしくなってきました。(日姓浅葉)

田中 昌子(大阪) 御長老の方々のお祝いを申し上げます。花と和紙の生活に毎日余儀

なく暮らしております。

高野 康慶氏 柏原高女二十三回卒業生のクラス会が毎年催され出席しております。今年(五五年)は六月に小倉の菖蒲園でのクラス会に出席。みるもの聞くもの懐旧の念にうたれました。二十三回卒業記念アルバムに、二十数名の先生方がのこっておりますが、私が唯一一人の生存者です。

年会費をお忘れなく!!

本会の年会費は金一、〇〇〇円です。年会費は本会の運営の重要な資金です。どうぞ、お忘れなく、便宜な方法で送金方お願い申し上げます。
ご送金が出来ますと「山ざる」の発送にも支障を来すおそれも起ります。よろしく御配慮をお願い申し上げます。

財務理事 小谷 正己

高見 嘉都司氏(市島)左記の方の消息が判明しましたので会員としてご追加下さい。

影山 三郎氏(市島町)葛飾区東新小岩六ノ五ノ八 電六九二一〇二八七

係より、有難うございました。ご協力感謝します。

塚口 生郷氏(氷上・油利)故郷を遠く離れて流れ、現在水戸市に住んでおります。旧職業(国鉄職員)がら、あちらこちらと転動している内に現在の所に落ち付きました。二男一女、それぞれ成長して家を持つようになりました。

常岡 亮氏(柏原)九月と十月に親戚の葬儀が相次いで行われ、柏原にその都度帰省しました。いつ見ても故里の景色は懐しいものです。その風景の中でおだやかに生活を営んで居られる丹波の人々の姿が本当に羨しく感ぜられました。

畑 武司氏(春日・野村)五五年八月に豊中市服部で、コンビニエンス・ストア「ショップはた」を開店いたしました。長男と家内が早朝より頑張っており毎日大変ですが張り合いもあります。

浜田 美代子さん(柏原)「山ざる」第十号から御送り頂いておりますが、本当に昔日がなつかしく楽しく拝見させて頂いております。主人が東京転勤のため、こちらへ来ましてからもう十五年にもなります。又郷里からは柏中同窓会のお便りも毎年頂きまして、来年は是非共出席させて頂こうと思っております。(柏原高三十二年卒旧性大西)

東田 実氏(山南・上滝)勤務先は折箱製造販売業、小生は経理事務の仕事です。十六日は親戚の法事と重なり出席出来ません。

久安 敏夫氏(柏原)昨年来健康を害していましたが、昨今はようやく元気になって参りました。

藤原 弘行氏(山南・和田)近年神経痛(腰痛)のため医者通いです。

堀井隆川氏(山南・岩屋)都心より最西方の八王子市高尾近くに住んでおりますと、四季の変化の味わい深い良さが感じられます。高尾方面にお越しの節はどうぞお立寄り下

さい。(真照寺住職)

堀川 万次氏(柏原・上中町)不死身の健康性豪で、日夜SEXを楽しんでいる天下無敵の八十三の私は、最高の幸福で不老腹上死の理想に燃え大自然を友として悠々自適。

前田 和秀氏(柏原)小生本年八月八日心筋硬塞発作を起こし、九日より五十日間自衛隊中央病院入院。退院后一ヶ月自宅療養をしました。人生で初めての入院生活をし、今までの医師としての医療でなく、患者としての医療体係をみるのが出来、現代医療の歪みを感じました。今後はこの貴重な体験を生かしてよりよき医療に従事していきたいと思えました。

宮本 はるゑさん(市島・上田)第十一号「山ざる」お送附下さいまして初めて見せて頂き感謝いたしています。総会のご案内を頂きましたが何しろ私歩くことが困難でございますので残念ながら欠席させて頂きます。

最上 次郎氏(美の郡)この春、全く思い

がけなく、水上郷友会とは全く別のルートから春日建設の伴仲さんにお目にかかり人のめぐり逢いの奇縁に今更ながら驚くばかりでした。三年前大手術をしてもうこれでおしまいかと観念したのが助かり、今では元氣を回復、好日の日々を感謝しています。

森田 淳二郎氏(篠山)尚志館には目下柏原高校出身者が四名(東大、早大、明大、法大)在館、みんなおとなしく、よく勉強しております。但し神戸出身者と比べるとやっぱり言語も、動作も、マナーもローカルな感じですが。私は「丹波人の素直さと純粹さを失うな」と教えております。良い学生を送り込んで下さい。

八木 重光氏(柏原・田路)就職して一年半、毎日仕事に追われるばかり。皆さん自分を見失わないで下さい。田舎が大好きです。

山本 鬯勇氏(春日)啄木ではないですが、ふるさとの言葉になつかしさとやすらぎを感じるのは年令のせいでしょうか。

吉住 重造氏(春日・中山)十月に次男が結婚して別に世帯を持ちましたので家内と二人になり急にさびしくなりました。休日には園芸などやっています。

若森 敏郎氏(山南)二十数年の電源開発(働勤務も停年まで後一年を残すのみとなり、本年十月一日付で、日本プラント協会に移りました。今後は日本の技術の紹介のために諸外国を飛び廻ることになると思います。

梶浦 浩二郎氏(揖保郡)中学の級友後藤豊次君の住所等をお知らせ致します。

〒248、鎌倉市津一〇五〇―五九 電〇四六七―三二一〇八五

梶原 清氏(篠山)やす子さん(山南)貴会への入会を希望いたします。総会へは妻やお子が出席させていただきますので何卒よろしくお願い申し上げます。

☆

賑やかに五五年度総会

五十五年度本会総会は、十一月十六日正午より、東京青山で開かれた文化勲章受賞祝賀会、祝寿会の催しに続いて開かれた。

まず伴仲副会長の司会の許に、足立会長挨拶から始まり、型の如く進み、小谷正己財務理事の会計報告を承認したのち、予定の議事を終了、懇親会に移った。

西川政一顧問の乾杯ののち、この度の衆参議員選挙に全国区で高点で見事当選した篠山町出身の梶原清議員の夫人、梶原やすこさん(山南町出身)が出席されていたのが紹介されて挨拶されるなどで一段と賑やかになり、その間、はるばる郷土から出席された小森健吉水上町議長、杉本喜八郎春日町長からふるさとの近況などの報告を聞いて、郷里の空に思いを馳せる一ときもあって、郷友会にふさわしい雰囲気を呈した。かくして午後四時すぎまで歓談を続けて漸やく散会となった。当日の出席者は次の通り。

総会・祝寿会出席者(敬称略)

△文化勲章受賞者 小谷正雄

△祝寿者 林田孝子 松山幸逸

福島輝子 菱田ふみ子

(欠席) 田沢よし子 矢持七郎)

△招待者 小森健吉(水上町議長)

杉本喜八郎(春日町々長)

△会員 足立三治 足立徹 足立治 足立謙

吾 足立正 秋元多美子 有田喜一 上田

鉄太郎 上山顕 植村章子 小杉武生 小

谷正己 小林武浩 近藤勇夫 坂上勝朗

田中寛 田中篤郎 谷垣正雄 出町京子

(西崎祥) 西川政一 伴仲信次 藤尾ちあ

子 松本源吉 村上末吉 余田貞雄 渡辺

金三 有田毅 大竹博美 吉住重造 小田

富士夫 木村つたえ 植木伍鹿 梶原やす

子 以上四十一名

五十五年度会計報告書

さる十一月十四日総会において承認された昭和五十五年度関東水上郷友会の会計報告書は別記の通りで、財政上極めて余猶のあるところを示している。

新年役員会

昭和五十六年度新春恒例の役員会は二月六日午後五時半より東京日本橋宝町の「鴨川」で開催、足立三治会長はじめ二十五名出席、まず伴仲氏の司会でなごやかに会は進行した。久しぶりに参議院議員の田英夫氏も姿を見せ、昨秋柏原町に帰り、祖父田健治郎男爵の五十年祭を営んだり、鏡ヶ坂トンネルを視察したりして、祖先の地をなつかしんだりした話や、有田喜一元文相が今春伝記を出版し、郷里水上町に胸像が建つことなどの報告があり、充実した新春初会合であった。

出席者次の通り

荻野武 足立徹 田英夫 常岡幹彦 上山顕

田中篤郎 須原清 西川政一 伴仲信次

坂上勝朗 渡辺金三 足立正 上田鉄太郎

有田喜一 秋元多美子 吉住重造 下中昭男

木村つたえ 足立三治 植村章子 谷垣正雄

永井常資 渡辺隆男 前田和市 足立正

松山幸逸

昭和55年度 会計報告書				関東米上郷友会			
自昭和54年10月1日 至昭和55年9月30日							
収入の部		支出の部					
科目	金額	摘要	科目	金額	摘要	科目	金額
繰越金	691,490	現金 83,172 前期より繰越預金 120,000 (郵) 振替 488,318	出版費	739,702	山ざる11号製本印刷費 1,500冊, 郵送料, 外語掛り		
会費収入	392,000	272名	通信印刷費	124,370	総会通知印刷及郵送料外		
広告収入	320,000	会誌山ざる11号広告掲載料37名	支払手数料	11,100	振替貯金払込手数料82件		
寄付金	160,000	足立三治氏外15名	総会費	265,440	S54.11.23 於銀座ニューアサヒ会食費外		
受入手数料	300,000	明治生命代理店収入	長寿祝費	132,000	長寿者祝銀杯4個 @33,000		
総会費収入	235,000	5000×41名=205,000 10,000×3名=30,000	会議費	7,150	山ざる編集会議費用		
雑収入	39,975	役員会費残金 29,820 山ざる発行懇親会費残金 10,155	繰越金	858,703	現金 27,862 定期預金 420,000 振替貯金 410,841		
合計	2,138,465		合計	2,138,465			

関東氷上郷友会の沿革

本会は明治二十九年（一八八六年）十一月二日、東京神田の料亭において創立の発会式を行なったといわれる。

当時東京帝国大学の学生安藤広太郎（後の農学博士）、同田昌（後の大蔵次官）氏らの奔走によって結成、会長には旧柏原藩主織田信親子爵、副会長に田健次郎男爵（元台湾総督）が就任。会の目的は、東京における郷土出身者の親睦と友情を深めるとともに、郷里氷上郡の開発発展に寄与することにあつた。以来七十余年、幾多の曲折を経ながらも今日まで存続し得たことは、先輩各位の郷土愛のためのもので、とくに井上雅二、矢本平蔵、小谷哲、石橋治郎八氏らの功績を逸することはできない。

昭和二年一月二八日、東京新橋駅楼上の「日本食堂」で戦後第一回の「氷上郷友会」が開催された。百名を超える郷友が喜々として集い、戦中、戦後の飢餓と混乱、生死を生き抜いた郷友たちが、相擁して久闊を叙し、熱っぽい雰囲気、ふるさとやありし世代の苦

悶を語る感激の大会となつた。

田健次郎会長（昭和五年没）のあと久しく空席であつた会長の椅子は織田信大子爵、安藤広太郎農学博士とひきつがれたが、この歴史の大会において石橋治郎八石橋生系社長を会長に迎えた。石橋会長は以来十八年間の長期に亘つて郷友会発展に腐心され、昭和四六年八月、八三歳をもつて逝去された。同年十一月、つるや産業社長足立三治氏を会長に迎へ今日に至つてゐる。

関東氷上郷友会会則

(名称)

第一条 本会は関東氷上郷友会と称する。

(目的)

第二条 本会は会員相互の親睦を図り、併せて郷土の発展に資することを目的とする。

(会員)

第三条 本会は氷上郡出身者及び縁故者を会員とする。
(役員)

第四条 本会に左の役員をおく。

名誉会長 一名

顧問 若干名

会長 一名

副会長 若干名

常任理事 若干名

理事 若干名内二名会計担当

監事 二名

(役員の仕事)

第五条 会長は本会を代表し会務を統轄する。副会長は会長を補佐し、会長事故あるときは副会長の互選により一名がこれに当る。常任理事及び理事は会務を執行する。監事は会務及び会計を監査する。顧問は会長の諮問に応じ本会の発展を促進する。

(役員の選出)

第六条 会長及び役員は総会において選出する。

顧問は理事会の推薦により委嘱する。

(役員の仕事)

第七条 役員の仕事は二年とし、重任を妨げない。

(役員の仕事)

第八条 本会の役員は総て名誉職とする。

(會 議)

第九條 會議は總會と理事会に分ける。

總會は毎年一回十一月に開き必要に応じ臨時總會を開催する。理事会は会長、副会長、常任理事及び理事を以って構成し、必要に応じ会長が招集して開催する。

(會 費)

第十條 本会の會費は年額金一〇〇〇円とする。

別に必要に応じ理事会の決定による額を徴集することができる。

(寄附金)

第十一條 寄附金は理事会の承認により受納する。

(會計報告、會則の改正)

第十二條 本会の會計年度は毎年十月一日より翌年九月三十日迄とし、會計報告は十一月の總會において行なう。本會則の改正は總會の議を経て決定する。

會費領収報告 (自昭和5555:122:1016)

55年度分 足立石蔵 足立和雄、足立一之

足立忠三 足立俊亮 足立寿也、阿江ひさ子

足立元美 阿部すみゑ 赤松誠司 赤松たつ

天野清子 綾木健 荒木泰雄 有田潔司 有

田毅 有原美美子 井田光男 井上庸子 石

井和也 石本美栄子 泉睿子 磯畑重蔵 今

田二三夫 岩曾豊明 岩田洋子 上嶋一晃

上田三四二 内田泰代 小川晴通 小田八重

子 小野千恵子 大槻作治郎 大西三鈴 大

西泰子 大野渥子 岡原裕泰 荻野一雄 荻

野定一郎 荻野聡子 荻野武 荻野雄一郎

荻野節子 可部美智子 加藤信太郎 柿原庸

勝野きしの 川村和子 木寺昭三 木下五郎

菊地顯三 岸田勇 小糸イキ 小西保 小谷

崇 小山清子 河本幸子 近藤勇夫 近藤田

治 佐藤蘭子 酒井重男 笹倉武夫 笹倉強

笹倉郁子 下井澄子 須原逸郎 鈴木垣子

梶田広子 清藤節子 莊克衛 田沢よしゑ

田中篤郎 田中清昭 田中茂雄 田中憲雄

田中寛 田辺善人 田原修 田村勝典 田

村元子 田村豊 高取由美子 高見修治郎

高見秀夫 高桑良弥 高野康慶 谷達雄 谷

恒博 谷川義男 千葉和子 千葉淳子 常岡

亮 田英夫 東後一美 東郷茂 豊島幹雄

中西しげ子 中野周子 西川政一 西原のゑ

西山敬次郎 羽賀澄代 畑正義 畑光 畑延

雄 畑義博 畑武司 広田卓生 広瀬雄造

福井謙三 藤田かね 藤田千治 藤田玲子

細見次郎 堀井隆川 松本源吉 待場康平

宮城あい 宮崎豊文 宮本はまゑ 村上忠紀

村上喜宥 百木正孝 森田節子 矢本博一

山岸幸子 山本一志 山本八重子 山本徳治

横田公子 横溝初子 吉田恵美子 吉川英之

頼沢博 頼沢豊 依藤俊平 渡辺金三 渡辺

勉 渡辺久子 春日町役場 春日町長杉本喜

八郎

56年度分 足立要 足立玉治 足立彌 足

立徹 足立幸夫 上山頭 梶浦浩二郎 木村

つたゑ 小谷正己 近藤敏雄 土田直吉 常

岡幹彦、永井輝江 袴塚節子 林谷集 古川

美代子 松枝勝 松山幸逸 光山秀子 山内

隆行

55・56年度分 池上碩郎 上田讓 上山英

- 夫 植木英吉 大木千里 大木正徳 大竹博
 美 神野妙子 木下忠 菊地武利 菊地洋子
 斉藤陽子 正呂地郡治 田中さち子 田辺輝
 一郎 鶴田宏 富川清司 広瀬五男 広瀬幸
 太郎 藤原ふみ子 宮崎博志 村上末吉 由
 良浄太郎
 55—57年度分 守藤英二 小田邦江 片山
 日幹 川端教子 小谷寛治 莊正衛 西尾久
 之 西崎祥 広瀬靖典 吉田勇司
 55—58年度分 福島輝子
 55—59年度分 足立教子 足立謙悟 小杉
 武生 近藤哲夫 坂本重雄
 55—60年度分 波多洋三
 56—57年度分 植村章子
 56—58年度分 藤尾ちえ子
 56—60年度分 安原三智子
 57—62年度分 浜田美代子
 57年度分 上田鉄太郎
 57—58年度分 尾上典世 伴仲信治
 58年度分 小谷正雄
 58—59年度分 坂上勝朗
 62年度分 小林武治
 52—56年度分 永井貞子
 52—55年度分 小田邦子

- 53—55年度分 栗田節子
 53—60年度分 古藤一
 54—55年度分 柿原武司 粕谷進 小野勝
 弘 木呂子恵美子 杉岡明美 関正治 高見
 久子 高見寿子 中松美年子 東田実 藤田
 正雄 最上次郎 森田淳二郎 若栗すき子
 54—56年度分 上村愛子 斉藤俊一 高見
 嘉都司 竹林すま子 矢持七郎 前田和彦
 54—58年度分 佐中哲郎 永井勇

寄附者芳名 (敬称略)

- 足立三治 (三〇、〇〇〇) 光山秀子、上田
 鉄太郎、林田孝子、松山幸逸、菱田ふみ子
 (各二〇、〇〇〇) 小杉武生 (一五、〇〇
 〇) 小森健吉、杉本喜八郎、福島輝子、田
 辺輝一郎 (各一〇、〇〇〇) 千葉淳子
 (九、〇〇〇) 足立徹、小谷正雄 (各七、
 〇〇〇) 小林武治、有田喜一、波多洋三
 (各五、〇〇〇) 坂上勝郎、畑秀夫 (各
 三、〇〇〇) 古藤一 (二、〇〇〇) (合
 計二三一、〇〇〇円) (自五五・二・一六一
 至全二一・一〇〇)

関東氷上郷友会役員

- 名誉会長 有田喜一
 顧問 生駒篤郎・上山 頭・西川政一・
 小谷正雄・小林武治
 会長 足立三治
 副会長 渡辺金三・伴仲信次・松山幸逸
 監事 竹村政雄・須原清
 理事 永井常資・山中一郎・村上末吉
 前田和市・荻野 武・足立 正
 小谷正己・植村章子・足立誠一
 木村つた江・常岡幹彦・高見嘉都
 司・村上大憲・足立かをる・林谷
 集・谷垣正雄・渡辺隆男・田 英
 夫・足立 徹・上田鉄太郎・芦田
 律子・山本清士・吉住重造・坂上
 勝朗・小田富士夫・小川晴通・田
 中篤郎・下中昭男・秋元多美子・
 西崎 祥・足立謙吾



ある国には 資源がいっぱい埋っている
ある国には 技術があるという
また ある国には……

世界は 別々に豊かさをもっている
日商岩井は そんな1つ1つの豊かさを
結びあわせることで より大きな豊かさを
実らせたいと 考えています

明日のゆたかさを考える



建築材料販売工事

建設大臣登録（般）51 第 1834 号

中央建材工業株式会社

取締役
東京営業所長

荻野武

（市島町出身）

本社 名古屋市千種区若水町 3—26

電話 052 (761) 6181番（代表）

東京営業所 東京都中央区銀座 7 丁目 14—3

電話 03 (543) 8106番（代表）

大阪営業所 大阪市西区靱本町 2 丁目 4 番10号

電話 06 (443) 6665番

仙台営業所 仙台市高松 2 丁目 1 番15号

電話 0222 (73) 5724番

Slider® BASEBALL UNIFORMS

あらゆるスポーツウェアのご相談は当社へ

Onaji Mai Mai®

園児服・園児用品

スクールウェア・スクールブラウス

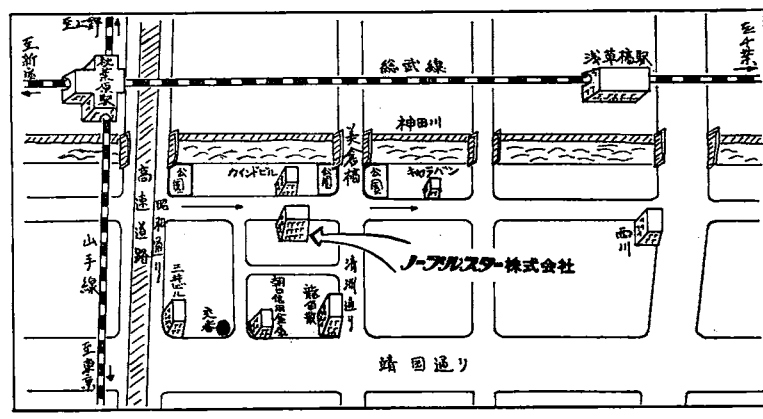
J-アシスタ-株式会社

取締役社長 吉住重造

(春日町中山出身)

本社 〒101 東京都千代田区東神田 2-4-7

電話 03 (866) 9121 (代表)



◆エレクトロニクスパーツの専門商社◆

株式会社 三 誠

東京都文京区湯島2-24-13 (834) 3171 (代表)



取締役社長 足立 誠一

☆主要取扱メーカー

日本航空電子工業株式会社

多治見無線電機株式会社

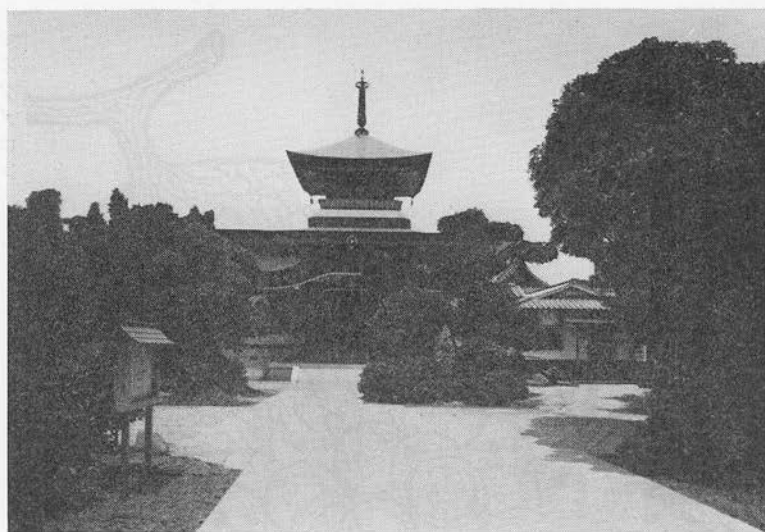
株式会社フジソク

日本開閉器工業株式会社

ライン精機株式会社

本多通信工業株式会社

Sonnenschein



蓮久寺本堂及客殿 (文京区白山5丁目) 55.10.5 落成—当社設計施工

綜 合 建 設 業

建設大臣許可第233号

春 日 建 設 株 式 会 社

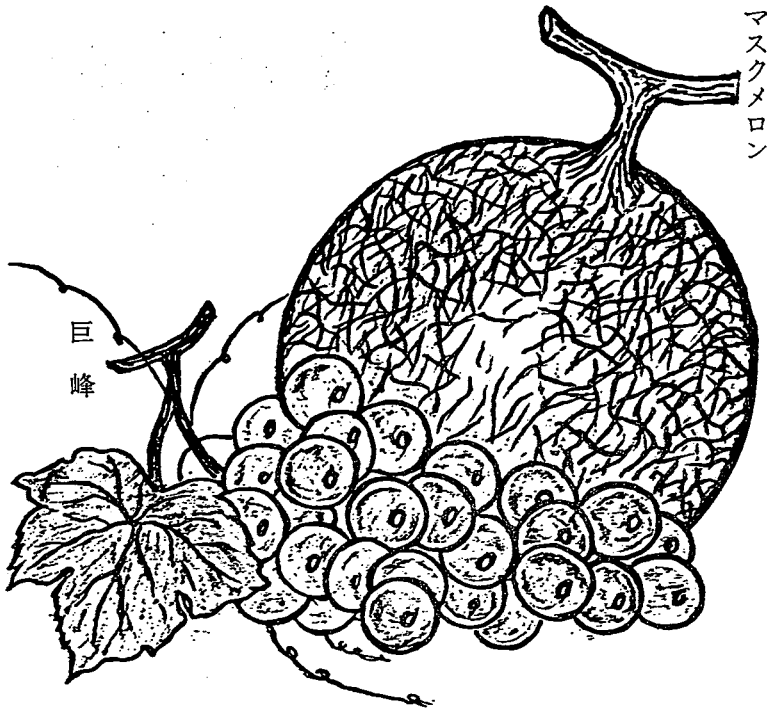
代表取締役 伴 仲 信 次

専務取締役 伴 仲 信 義

(春日町出身)

東京都千代田区飯田橋2丁目9番3号

電話 東京 (264) 4011 番 (代表)



マスクメロン

巨峰

松尾フルーツ

上田鉄太郎(春日町野山出身)

〒102 千代田区麴町6-6 電話 03(264)-5060-1

日本海運振興会会長

有 田 喜 一

東京都千代田区平河町二丁目四番
電 話 (二六三) 九四一七番
東京都世田区成城四ノ一ノ一五
電 話 (四八三) 一二〇九番
兵庫県氷上郡氷上町谷村
電 話 〇七九五八(二)〇〇〇八番

株式会社 三 葉 水 道

代表取締役 橋 爪 忠

(氷上町黒田)

千葉県八千代市八千代台西 7-5-29

電話 0474-84-7121番

日本メキシコ協会会長
日本バレーボール協会会長
アジアバレーボール連盟名誉会長
国際バレーボール連盟副会長
日商岩井株式会社相談役

西川 政 一

(住) 東京都杉並区善福寺二ノ三五ノ一六
電話 (三九〇) 一三一六番
(寓) 静岡県伊豆高原
電話 〇五五七―五三一―二五六〇番

学校法人国学院大学理事
国学院高等学校々長
学校法人国学院大学幼児教育専門学校々長
財団法人日本私立大学連盟理事
財団法人私学研修福祉会理事

小林 武 治

東京都武蔵野市境南町一―三〇―二〇
電話 〇四二二―三三二―四七九六番

調布市社会福祉協議会理事

調布市豊かな老後のための市民会議実行委員

老人問題研究所

木村 つた江

東京都調布市東つつじヶ丘2-39-5

電話 東京(300) 1505番

株式会社 つるや洋装店

株式会社 東返子駅前ビル

東海産商株式会社

代表取締役 小 谷 正 己

返子市返子 1-6-4

電話 0468. 71. 3075

71. 6449

株式会社 近藤写真製版所

取締役社長 近藤 勇夫
(国領出身)

東京都新宿区下宮比町8番地
電話 (260) 6281番 (代表)

のびのびベビー・こどものファッション 日商

株式会社



本社 〒158 東京都世田谷区瀬田1-22-19
TEL 03-700-3121 代表
ファッションセンター 〒158 東京都世田谷区玉川台1-13-12
TEL 03-708-1151 代表

代表取締役 山本清士 (春日町小多利)

郷友の皆様 生命保険に加入されるなら
ぜひ当会をご利用ください

明治生命保険相互会社 代理店

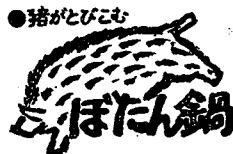
ひかみ会

代表 伴 伸 信 次

東京都千代田区飯田橋2丁目9番 春日建設(株)内
電話・東京 264-4011(代)

城下の面影を残す 奥丹波柏原の宿

山菜料理からアマゴ・ヤマメ・鱒・鯉・鮎・等川魚に始まり
香り高い松茸・丹波牛の肉料理、ポタン鍋



日本観光旅館連盟会員

三友楼

兵庫県 氷上郡 柏原町 八幡筋 電話：丹波柏原 (07957) ②1110~2

客室数17室、収容人員60名、駐車場完備、送迎用マイクロバス

認定生命保険士

参事 足立正

明治生命保険相互会社

トーヨーサッシ株式会社
東洋サッシ工業株式会社

取締役会長 足立徹

〒100 東京都千代田区内幸町二丁目二番二
電話(〇三)五九一―三三八八(代表)
(内線五〇一番)
直通(〇三)五九一―三七六五番

植木紙工所

代表者 植木一夫

東京都文京区白山三丁目一ノ十三
電話(八一―)八五七三番

ミワ電気工事株式会社

代表取締役 足立謙悟

横浜市西区岡野一丁目八番地八号
〒220 電話(〇五)三三三―五九二番(代表)

日本学士院会員
東京理科大学学長

理学博士 小谷正雄

自宅
東京都新宿区神楽坂一ノ三
電話東京(二六〇)四二七一代表
東京都大田区山王三ノ三六ノ四
電話東京(七七一)六六五二

D・M・Sダイレクト・メール・サービス株式会社
取締役 業務推進本部長 坂上勝朗

本社 〒101
東京都千代田区神田小川町一丁目十一番地
D・M・Sビル
電話東京(283)二九六一番(代表)

小田 富士夫

参議院議員

梶 原 清

株式会社 環境計画コーオペレーション

取締役 谷 口 捷

〒150 東京都渋谷区道玄坂一―一五―一七
ブリクレーラ道玄坂ビル八〇四
TEL (〇三) 四七六―一〇四〇

西 尾 久 之

横浜市西区西戸部町二―一―一八
電話 〇四五―二三―一四八三三

足 立 和 己

府中市栄町一―一五―二七
電話 〇四二三―六四―七二二七

名刺広告募集 協賛広告料三千円

(株) パンオーデオシステム

代表取締役 岡 林 逸 男

〒330 大宮市盆栽町五一四(押田ビル)
TEL(〇四八六)六五―三六九四(代表)
〒167 東京都杉並区善福寺四一八一九
TEL(〇三三)三九四―六八四四

エクステリア専門商社
株式会社 大洋

代表取締役社長 松 下 文 雄

本社 埼玉県朝霞市膝折3-7-5/TEL(0484-66-1551) (代)〒351

社団法人日本プラント協会・技術部

プロジェクトマネジャー

若 森 敏 郎

〒100 東京都千代田区有楽町一丁目八番一号
日比谷パークビルディング(三階)
電話東京(213)八五五―一番(代表)

大菱印刷有限公司

田 中 寛

〒101 東京都千代田区神田東松下町十
電話(256)九三五―七番

田 中 篤 郎

名刺広告募集 協賛広告料三千円

須原清

東京都中野区南台五の三〇の六
電話(三八一)一六二二番

高見産婦人科

医学博士 高見嘉都司

東京都板橋区熊野町四〇番地
電話(九五六)〇六〇〇番

高見齒科

高見幸男

〒176 練馬区錦町二一八一三
電話 九三三二六七三番

谷垣正雄

東京都杉並区高井戸西一―二四―一七
電話(三三三)六一六〇番

日本ビクター株式会社

西垣秀正

東京都中央区日本橋本町四丁目一番地ノ一
電話東京(〇三)(24)七八二番(大代表)

黒川木徳証券株式会社

投資顧問

能勢次郎

東京都中央区日本橋一―一六―三
電話東京 二七八―七八五三番
千葉市穴川二ノ三ノ六
電話(四七二)五二三八二番
自宅

参議院議員

田 英 夫

山 中 一 朗

227 横浜市緑区美しが丘三丁四六一一
電話 (〇四五) 九一一一四四九三番

中 井 良 平

次 長 広 瀬 五 男

株式会社テラモト
東京支店 営業部

東京都墨田区東駒形一丁目九番二号
〒一三〇電話 (〇三六二四一七九二番(代))

昭和企業株式会社

取締役 下 中 昭 男

(〒130)
東京都墨田区吾妻橋一ノ二三ノ三四
アサヒビル吾妻橋工場内
電話 (六二六) 四三〇七、九番

有限会社井上商店

社 長 井 上 和 三

三鷹市深大寺三八〇六
電話 〇四二一三二一三四八八

黒川木徳証券株式会社

畑 秀 夫

本社 東京都中央区日本橋兜町一丁目八番地
電話東京(666)一四八一(代表)一四八九番

波 多 洋 三

文京区春日二一七一二
電話(〇三)八二一一二八六〇番

日本育英会 東京支所

支 所 長 藤 田 正 雄

〒102 東京都新宿区市ヶ谷本村町四二番地
電話東京(03)二六九一四二六(代表)
川崎市多摩区王禅寺六七八一四
電話(〇四四)九五四一四九五七番

松 山 幸 逸
(竹水)

〒東京都豊島区西池袋四一八一八
電話 九七一—五七四三番

東洋ゴム工業株式会社

三 宅 良 夫

曹 禅 寺 住 職

村 上 大 憲

東京都大田区池上七丁目二番十号
電話 〇三一七五一—二〇三五番

完全複製 台北・故宮博物院の名蹟

■法書十二件

- ① 晋・王羲之・奉橘二帖(卷)……………定価三〇〇〇円
 - ② 晋・王羲之・快雪時晴帖(冊)……………定価三〇〇〇円
 - ③ 唐・孫過庭・書譜(卷)……………定価二〇〇〇円
 - ④ 唐・懷素・自叙帖(卷)……………定価八五〇〇〇円
 - ⑤ 宋・蘇軾等・四名家小品(冊)……………定価六〇〇〇円
 - ⑥ 元・趙孟頫・閒居賦(卷)……………定価五〇〇〇円
 - ⑦ 元・張雨・七言律詩(軸)……………定価四〇〇〇円
 - ⑧ 明・祝允明・慶誕記(軸)……………定価四〇〇〇円
 - ⑨ 明・文徵明・醉翁亭記(軸)……………定価六〇〇〇円
 - ⑩ 明・董其昌・杜甫詩(軸)……………定価六〇〇〇円
 - ⑪ 唐・懷素・千金帖(卷)……………定価二〇〇〇円
 - ⑫ 宋・蘇軾・黃州寒食詩(卷)……………定価五〇〇〇円
-
- ⑬ 宋・范寬・谿山行旅図(軸)……………定価一五〇〇〇円
 - ⑭ 宋・郭熙・早春図(軸)……………定価二〇〇〇〇円
 - ⑮ 宋・崔白・雙喜図(軸)……………定価二〇〇〇〇円
 - ⑯ 宋・米芾・春山瑞松図(軸)……………定価五〇〇〇円
 - ⑰ 宋・劉松年・羅漢図(軸)……………定価五〇〇〇円
 - ⑱ 宋・馬遠・雪灘雙鷺図(軸)……………定価五〇〇〇円
 - ⑲ 元・吳鎮・洞庭漁隱図(軸)……………定価五〇〇〇円
 - ⑳ 元・王蒙・具区林屋図(軸)……………定価六〇〇〇円
 - ㉑ 元・倪瓚・容膝齋図(軸)……………定価五〇〇〇円
 - ㉒ 元・趙孟頫・鵲華秋色図(卷)……………定価五〇〇〇円
 - ㉓ 元・黃公望・富春山居図(卷)……………定価六〇〇〇円
 - ㉔ 明・王絨・山亭文会図(軸)……………定価五〇〇〇円
 - ㉕ 明・沈周・廬山高図(軸)……………定価二〇〇〇〇円
 - ㉖ 明・唐寅・山路松声図(軸)……………定価二〇〇〇〇円
 - ㉗ 明・仇英・仙山樓閣図(軸)……………定価四〇〇〇円
 - ㉘ 明・董其昌・葑涇訪古図(軸)……………定価五〇〇〇円
 - ㉙ 清・王翬・溪山紅樹図(軸)……………定価四〇〇〇円
 - ㉚ 清・惲壽平・做倪瓚古木叢篁図(軸)……………定価五〇〇〇円

■名画二十件

- ① 唐人・宮樂図(軸)……………定価六〇〇〇円
- ② 五代人・丹楓呦鹿図(軸)……………定価六〇〇〇円

内容案内呈



二玄社

東京都千代田区神田神保町2-42/千101
 振替東京4-28782/電話(03)263-6051(代表)

美味無比 木の实酒

栗の三年酒

くり

さん

ねん

しゅ

この木の实酒「小鼓くりの三年酒」は、
 純粹の丹波産栗の实、梅の实など山野の
 木の实を原料として秘醸したもので、常
 用すれば胃腸を整え健康と美容と活力を
 増進します。

ストリートでお飲みいただきますと、さ
 わやかな梅の香りがひろがり、あと口に
 はコクのある栗の味が残ります。

お正月のお屠蘇には、縁起のよい
 「小鼓栗の三年酒」をお用い下さい
 キット好評です。

◆丹波焼壺詰 (1、500000 mml)
 ◆徳用びん詰 (350000 mml)

小鼓の西山酒造場

氷上郡市島町中竹田
 電話(〇七九五)⑥〇三三二二代

あと がき

▼この号で劃期的な編集は、會員名簿の掲載を見合わせたことである。名簿は読みものではないが、見ていると知人の顔を思い浮かべたり、住所や役職が変わっていたりして、なかなか興味深いもので、捨て難い味わいが湧いて来る。

それなりの掲載価値は認めているので、掲載を取り止めるには相当の決断が要るのであるが、住居も安定している今日、一年おきぐらいにして、その代り會員の消息や近況、ふるさとの情報や意見などを盛り沢山に収めることも、本誌の重要な使命と考え、思い切った措置に出たことをご了承願いたい。

さて、本号では名簿のページ分を埋めるのに若干の危惧があったが、會員諸民の協力のおかげでご覧の通りの、まことに読みごたえのある原稿を沢山寄せて頂いて充実した内容となったことを喜びたい。その一つ一つをここに挙げることは出来ないが、例えば、春日町在住の芦田確次氏、の「水上郡の埋蔵文化財」や、京都在住の荘正衛氏の「丹波の名工」茨城県取手市在住の若森敏郎氏の「これからのエネルギー問題」など、地方在住の方

々からの原稿が光っている。このほかに原稿ではないが、小谷正雄博士の文化勲章受章もこの号の誇り高い報告である。

何を申しても、本誌の使命はふるさとを同じにしている皆さんの共用のコミュニケーションの舞台ですから、その共用の舞台を最も有効に利用してもらうことが目的であります。何とぞ、會員の皆さん、ご遠慮なくご利用下さい。内容やページ数などご心配なくご寄稿下さることを願ってやみません。

今冬は北陸地方は何十年ぶりの豪雪に見舞われたと伝えられた。幸いに丹波地方はそれほどでもなかったようで、ふるさとの事となると気になります。よかったですね。お互いふるさとの血縁に心配をかけない

会誌「山ざる」第十三号のメ切りは昭和五十六年十二月末日です。発行は同五十七年四月の予定です。発行がおくれがちになります。お早めに随想、身辺雑記、紀行、詩文、何でも結構です。お気軽にご寄稿下さい。写真も添えて下さればなお幸いです。
(編集委員会)

よう頑張ろうではないでしょうか。何といっても、ふるさとを忘れることが出来ないのがわれ／＼であっては、この「山ざる」をたよりどころで、今後とも可愛がって頂きたいと願いますし、同郷の未加入の友人、知人をご紹介下さるようお願いいたします。

とまり木にふるさと思うおでん鍋 竹水

山ざる 第12号

昭和五十六年四月二五日印刷

昭和五十六年四月三〇日発行

編集委員 松山幸逸 足立正 坂上

勝郎 須原清 常岡幹彦

渡辺隆男 小田富士夫

発行所

関東氷上郷友会

東京都千代田区飯田橋二丁目九番三号

春日建設株式会社内 〒102

TEL東京〇三(24)四〇二一番(代)

振替番号 東京 一―二二二―三〇番

製作 株式会社 二支社

☆ 房総ドライブとゴルフのお誘い
——ぜひご参加ください——

本誌11号に紹介された『ふるさと村開村記—須原清氏』の旧近藤家別邸・前スイス大使館を見学したいとの希望が寄せられましたので、会員有志に呼びかけ、水上ゴルフ同好会のプレーも兼ねて、左記の通り一日清遊会を企画しました。参加ご希望の方は「はがき」で春日建設内水上郷友会宛お申し込みください。バスの都合で先着50名をもって締切らせていただきます。

記

日 時 六月十二日(金)・朝七時二十分出発・夕八時帰着の予定。

集合場所 春日建設KK前・千代田区飯田橋二ノ九ノ三・電話二六四一

四〇一一(国電飯田橋駅・水道橋寄り出口から九段下へ向い
徒歩五分左側・飯田橋二丁目バス停前・地下鉄は九段下を出
て飯田橋へ向い徒歩五分右側)貸切バスにて千葉に向う。

会 費 金一万円(但しゴルフ班のプレー代は別)

▼ゴルフ班 真名ゴルフ場着九時半、少憩後十時スタート。

▼ドライブ班 十時真名ゴルフ場出発、勝浦海中公園見学後、勝浦海岸の勝栄館にて中食休憩、大多喜城跡、笠森観音を見て長柄ふる里村センター(前スイス大使館)着。プレーを終えたゴルフ班と合流。ふる里村センターにて合同懇親の夕食会を開く。

世話人 伴仲信治・足立 正

交通事故

もし、あなたが加害者だったら……

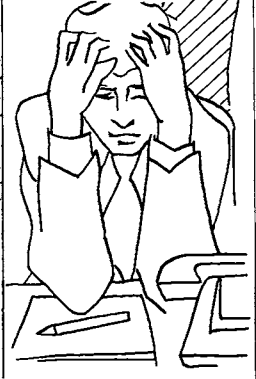
水かけ論の
あげく……



仕事中また
電話がくる……



いったい誰に
相談しよう……



自動車事故の経験がある方なら、おわかりのはずです。事故発生後の不慣れで非常にめんどろな話し合い、ときには「言い争い」、「水かけ論」になってがちがあきません。こんな悩みをスピーディに解決するのが

AIUの示談交渉サービス

賠償事故が発生した場合、AIUがあなたのために被害者と折衝・示談に当たりますので、精神的苦痛や時間、費用のむだから解放されます。もしもの時の心強いパートナーとしてお役に立ちます。

示談交渉から保険金のお支払いまでまかせて安心！

AIUの自家用自動車保険

●ご契約条件と保険料例(年払・割引なし)

保 険 金 額				年令条件	自家用普通乗用車 自家用小型乗用車	自家用軽四輪乗用車
対人賠償 無保険車 1名あたり	自損事故 1名あたり	対物賠償 (免責なし) 1事故あたり	搭乗者傷害 1名あたり			
万円	万円	万円	万円	15歳未満は別	84,600円	49,140円
10,000	1,400	500	1,000	21才未満は別	71,490円	42,850円
(1事故無制限)				26才未満は別	63,790円	39,130円

※上記以外に各種保険金額の組合せがあります。


※他社からAIUへの契約移行のとき、他社で無事故であれば無事故割引(最高50%)をいたします。

あらゆる保険について お気軽に ご相談ください



代表者
代理店 **永愛友商事** KK前田和子

〒107 東京都港区赤坂 3-1-2 AIUビル 電話585-0740(代)



GRUE BONNE 高級婦人服製造卸
つるや産業株式会社

取締役社長 足立三治

東京店 品川区西五反田 7-22-17番地

東京卸売りセンター12階

電話 (03) 494局3285~7番

本社 川崎市中原区新丸子 701番地

電話 (044) 722局6371 (代表)

社長室直通 711局3324